
逆行した日

水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆行した日

【Nコード】

N9232X

【作者名】

水

【あらすじ】

数十年が経った未来で、このかを失ってしまった刹那は、どうい
うわけか中学二年生の終わりに戻ってきていた。このかを失わない
未来を目指して、刹那は歩き出す

まえがき

まえがき、ということ。最初に一言。

趣味と自分の好みで書き始めました。なので、話の構成、全体の物語の構成が雑な部分が多々あると思われます。

そのあたり、スルーしてくれると助かります。

他二つのネギまの連載でネタ詰まり……で、ポツと浮かんで書き出したら楽しくなってきた息抜きです。

更新速度は他二つの進み具合というか進行の調子によって変わりますので、気長に付き合って下さると助かります。

それでは、趣味と好みで物語の着地点が見えないお話でよろしければ……。

過去に戻った日

火の手が上がる。屋敷のあちこちで、燃え上がる炎を掻い潜り、私は走る。

目指すは一番奥、私が護ると誓った彼女の元へ。

「お嬢様!!」

長、と呼ばうとするたびに止められた。名前で呼んではと言われて、駄目ですと困ったように笑えば、不満げにしながらそれでも、この呼び方を許してくれた。あの頃に戻れたような、気分になれるのだと。今は遠い友達を思い出せると、懐かしそうに言った。

部屋の襖を開き、驚く。既に炎はここまで及んでいて、部屋の中に二人の男女がいた。

「ご覚悟……!!」

絞り出すように男が言って刀を振り上げる。女は、悲しげに目を閉じていた。

駆け出し、腰に差した刀を抜く。十年以上愛用し続ける相棒が牙をむいて、男に襲いかかった。

「神鳴流——斬岩剣!!」

後ろからは武道に反する、そんなことを思っ、それがなんだと、思い直した。

背中から血を噴出して男が倒れる。女はゆっくりと目を開けて、私を見た。

「せつちゃん」

「お嬢様……よかった、ご無事で」

逃げましょう、と手を差し出した。外は敵だらけ、急がなければまた襲われる。他の仲間が食い止めてくれているうちに、早くと。けれどその手を、お嬢様は首を振って拒絶した。立ち上がりず、座ったままで。なあ、と話しかけてくる。

「もう、手遅れみたいや」

「いいえ、まだ間に合います。とにかく、今はもう逃げましょう」
「手遅れなんよ。うちの体に、毒が入ってるから」

毒、ということは食事を用意した女中たちも、敵だったというわけで。それは今となっては後回しの真実。

お嬢様にとって、毒は意味をなさないのに。なぜ、と。

「……魔法がな、使えないんよ」

「え……」

「たぶん、結界やな。魔法を使えなくする。媒介がどこにあるのか、もう分からん」

治癒魔法を使えば解毒できる毒も、魔法を使えなければ意味が無い。お嬢様の口ぶりだと、今から別の方法で解毒を行おうとしても、間に合わないのだろう。絶望的だった。

「そん、な……」

口の中が乾いていく。どうして、お嬢様がこんな目に合ったと、誰かを責める。

そんな私に、お嬢様は、とても綺麗な笑みを浮かべた。

「結局、お父様も、うちも、東と西を仲良くさせることは出来なかった」

「そんなことはありません。だって、和解を成立させたのは、お嬢様じゃないですか……」

「紙面だけの、協力しようって綺麗な言葉を並べただけの和解や。みんな、東に下ったのだと、怒った。せつちゃんも、知ってるやろ？」

「それは……」

東を倒せと、叫ぶ声は収まらなかった。それどころか、お嬢様が長となつてからは、さらに酷くなったように思う。表面上は穏やかで、けれど水面下は荒れ狂っていて、怒りと恨みの声は静まることを知らなかった。

「……うちが、過去に仮契約してたのも、原因やろうなあ」

「……そう、ですね」

否定の言葉を、吐けなかった。お嬢様は、もう全て分かっていた。西洋魔術師との仮契約を、今はもう解除しているとはいえ、行っていた。東の者の、従者だった。

それが、水面下で暴れていた者たちを、刺激した。彼らにとって、お嬢様は西ではなく、東に組みする者となっていた。

反発はあつたけれど、それでもお嬢様は長となられた。東と西の関係を良くしようと、尽力した。それが余計に、いけなかった。

和解が成立し、彼らはお嬢様を敵とした。そして、敵は滅ぼすのだと、叫んだ。

「——ゴホッ」

「お嬢様!!」

咳き込んだお嬢様の体が倒れる。支えたその体は冷たく、口から血が溢れていた。もう、限界なんだろう。

悔しさに唇を噛みしめる。刀を握った手に力が籠る。どうしても、もう意味を成さない問いが頭の中で繰り返される。

どうして、このちゃんがこんな目に合うんだと、何もかも遅い、今になって。

「はっ…せつ、ちゃん……」

「お嬢様……」

「みんな、はな……西を、守りたいだけ、なんや。それは、うちも、みんなも…同じ、気持ち」

「はい……わかって、ます」

「せやから、お願いや……みんなのこと、恨まんという」

「それ、は……」

このちゃんをこんな目に合わせた人を、恨むなど。たしかに彼らは彼らなりに、西を守ろうとした。その結果が、このちゃんをこんな目に合わせた、それだけのことなのかもしれない。

でも、許せることじゃない。だってこのちゃんは、私の大切な親友だから……許せるわけが、ない。

「うちな、みんなに…せつちゃんにも、みんなにも、傷ついてほしくないんよ」

「でも、お嬢様……」

「うちが守りたいと思ったのは、西とかそんな大きなもんやなくて、みんなや。東と仲良くすれば、守る力が增える、みんなを守ることが出来ると思ったんやけど……駄目やった、みたいや。急ぎすぎたのかも、しれんな」

「……間違つてなんか、いませんよ。私が、保証しますから」
「ほんま？なら、よかったえ……」

東と和解するのは、間違つてなんかいなかった。ただ、それ以外の
たくさんのことが、間違いだった。でも、それは言いたくない。言
えない。それなのに、このちゃんは自分で、言ってしまう。

「うちじゃ、駄目やったんや……」

「お嬢様……」

「うちは東に近すぎたんや。何も知らなかった、あの頃にうちは、
間違いを犯してしもた」

無知とは時に罪である。そして世の中には、知らなかったですま
されないことがあるのだと、今になって私たちは思い知らされる。絶
望の中で、つきつけられる。

「後悔は、してへんけど……うちは、知らなきゃあかんかった」

「……そう、ですね」

「仮契約、な……うちは、絶対にしては、ならなかったんよ」

「……ええ」

何も知らず、後のことも何も考えず。ただ、その一瞬の為に。
知っていれば、別の道があったかもしれない。けれど知らなかった
私たちは、その道を選ぶほかになくて。

あの数年間で得た絆は、かけがえのないものだったけれど、本当に
これでよかったんだろうか。

「……なあ、せつちゃん」

「はい」

「名前……呼んでえな」

開けているのもつらいだろう目を、開いて。伸ばされた手を、強く握り返した。

「この、ちゃん……」

「もつと……」

「このちゃん……このちゃん、この、ちゃん……」

「……せっちゃん」

嬉しそうに、笑って。握った手から、力が抜けた。

すり抜ける手を掴もうとして、それなのに掴めなくて、落ちていく。目が、閉じられた。

「この、ちゃん、このちゃん、このちゃん！」

揺すっても、叫んでも、このちゃんは目覚めない。目を開けてくれない。

「ああ、あ、あああああ——！！！！」

慟哭、それが正しいのだろうか。溢れる涙を拭うことも出来ず、このちゃんの体に縋り付いて、泣いた。

「どうして、どうして……！」

何を間違えていたのか。取り返しのつかない間違いを犯したのは、あの頃で。もう、遅すぎた。

後悔も、懺悔も、今更になってしまった。無知が罪だと、気づくべきだったのだ。

結局、私は名前の通りに、刹那を生きるだけで、先のことなんて見

ていなかった。止めればよかった、そうすれば、こんな未来ではなくて、違う未来へ続く道を、選べたかもしれないのに。
私も、このちゃんも、間違えてしまったのだ。

「ごめんっ、ごめん、このちゃん。ごめん……」

体が熱い。火が、すぐそばで燃えている。逃げることは出来るだろうか。出来ないかもしれない。
でも、逃げるつもりはなかった。私はもう、ここで終わる。

「私も、すぐに行きますから」

護れなくてごめんと、謝ることしか私には出来ない。

「刹那!!」

切羽詰まった龍宮の悲鳴に閉じていた目を開けた。目の前に迫る巨大な斧と、それを振り下ろす鬼がいる。
瞬時に状況を確認。右手には愛用の刀、周りには十数の妖怪。龍宮はそのうちの数体に囲まれて動けない。服を見下ろす。中学の頃に着ていた裏の仕事用の仕事着。

「……え？」

思考時間はコンマ数秒。変わらず迫りくる斧をするりと避けて鬼の懐に入り、横薙ぎに刀を振るった。

「どうして、私は……」

「刹那、ぼんやりしている暇は無いぞ！」

「あ、ああ……」

突拍子もない事態に、記憶が混乱して意識がぐちゃぐちゃだ。龍宮への返事も、どうにも気の抜けたものになりがちで、これでは駄目だと意識を無理矢理に切り替える。

どうにも状況が呑み込めないが、これが仕事で、今が戦場だだけ考えればいい。落ち着きさえすれば、長年の経験が勝手に気持ちを切り替え、体を動かしてくれる。

「っし、はあああ!!」

振り上げ、振り下ろし、振り抜き、突き刺し、突き上げ、薙ぎ払う。数は多いが、それほどの強さでも無い。だが、麻帆良に侵入してくる妖怪にしては強い。先生方なら心配は無いだろうが、生徒だと苦戦するかもしれないな。

「神鳴流——雷鳴剣！」

粗方斬り捨て、残りは雷で一掃する。視線を巡らせ、辺りの気配も確認するが、私たちの管轄の分は終わったようだ。龍宮の方を確認すれば、ちょうどそちらも終わったらしい。

「お疲れ」

声をかける。とても不思議そうな目で見つめられて、首を傾げた。というよりも、私はいったいどうしたというのだろう。改めて自分の姿を確認すれば、やはり着ているのは中学の頃の仕事着で、持っ

ている刀は夕風だった。おかしい。

「刹那、でいいんだよな？」

「……当たり前だろう。何を言い出すんだ」

おかしいことを言い出す龍宮。そもそもなぜ、彼女がここにいるのか。いや、違うか、ここにいていいんだ。別におかしくない。前に一緒に仕事をした時も相変わrazる腕前で——あれ？

前っていつだ。確か半年ほど前に一緒に仕事をして、随分と会っていなかったからいろいろと話をしたはずだ。なのに、何故だ。昨日も会った……いや、というよりも今日、学校で、普通に同じクラスで、先生の授業を——

「おい、刹那？」

「ッ……」

どうした、そう問いかける龍宮を見上げる。おかしいな、こんなにこいつと身長差があったか？私も背が伸びてもう少し縮まったはずなのに、でもいつもこんな風に見上げていたような。分からない。私は、いったいどうしたんだ？何を覚えている？

「た、龍宮……」

「……さつきから様子がおかしいな。いったい、どうしたっていうんだ」

「そ、の……あ、ああ、そうだ。このちゃんの事なんだけど……」
「近衛？」

「そ、そうだ……」

このちゃん、その名前を口にして激しく頭の中を揺さぶられるような、そんな衝撃に襲われた。何十年分の記憶が纏めて、滝のように

流し込まれる。そんな感覚。

燃える炎の熱さ、嘗ての仲間を斬る感触——抱いたこのちゃんから伝わる、冷たさ。

ああ、駄目だ。ぐちゃぐちゃの記憶がさらにぐちゃぐちゃで、ぐるぐる回っている。思わず頭を抱えて、その場にしゃがみ込んだ。

「珍しいな、お前がお嬢様と呼ばないなん——っおい、刹那？どうした、大丈夫か？」

お嬢様、ああそうだ。私は今も昔もこのちゃんをそう呼んでいて……今も、昔も？昔なのか？未来では無く？いや、そもそも今とは何時だ。

それに变だ。このちゃんは死んでない、だって今日も神楽坂さんやネギ先生と一緒にいて、私はそれを見守って……でも、確かにこのちゃんは死んだ。冷たいこのちゃんの体に縋った感覚は消えない。擦り抜けて行った手を掴めなかったあの瞬間を、私は覚えている。なんなんだ？このちゃんは死んだ？それとも生きてる？分からない、私に何が起こっている？

「龍宮、頼む。教えてくれ……」

震える声を絞り出して、心配と不審を宿す目で私を見る龍宮の腕を掴み、引き寄せる。その力に驚いたように目を見開かれて、そんなことを気にすることも出来ずに私は叫ぶように問うた。

「今はいつたい、いつなんだ——！！？」

流れ続ける記憶の濁流に、私はもがき続けるしかなかった。

過去に戻った日（後書き）

仮契約が原因かどうかとかそのあたりは触れない方向で……あくまでも、もしかしたらこうなっていてもおかしくない？という世界です。とりあえず、刹那逆行。主役は刹那です。

色々と変わった日

目を覚ますと、外はまだ暗かった。二月ももう終わり頃、太陽の昇りは遅い。

二段ベッドの上から飛び降りて、部屋を見回す。見慣れたような、懐かしいような、そんな気分になって、その違和感にこめかみを指先で叩く。

「——ん、刹那…随分と早いな」

「ああ……おはよう、真名」

後ろで欠伸をかみ殺して起き上がる真名に、そう返事を返す。

昨日一晩、真名には随分と付き合ってもらった。全てを話したわけでは無いが、私が多少なりとも『未来』の記憶を持っていることは話してある。

そう、未来。このちゃんが死んでしまふ、あの未来だ。私はどうやら、中学二年生の頃にまで戻ってきたらしい。

らしい、というのは、もしかすればこのちゃんが死んでしまふ未来は、中学二年生の私が見た夢かもしれないからだ。数十年という長い夢を、生死を賭ける戦場で見たというなら、修行のやり直しが必要だろう。

だがもし、本当に私が過去に戻ってきたのなら——私は、このちゃんが死ぬ未来を回避する。絶対に。

「ああ、真名。朝食は和食でいいか？」

「……………作れるのか？」

「……………え？」

不思議そうに問いかけられて、首を傾げる。ああ、そうか。この頃

の私は、剣の修行とこのちゃんを守ろうとすることばかりで、料理なんて作れないんだった。

何時だったか、このちゃんに手料理が食べたいと駄々をこねられて、それから色々と練習したんだったなあ。今じゃ結構な種類の料理が作れるようになった。味はこのちゃんのお墨付きで。

「まあ、一応な」

「それなら、任せようかな」

面白そうに笑う真名に任されて、私は朝食作りを始めた。

「……美味しいな」

「そうか。よかった」

ご飯に味噌汁、焼き魚にほうれん草の胡麻和え……何の変哲も無い普通の朝食。それでも、味の好みもあるし僅かに緊張していたが、真名の感想にほっと安堵の息を吐く。

「これなら毎日食べなくなるな」

「別に構わないぞ？ああ、後、一応弁当もお前の分作ってあるが、どうする？」

「もらう」

即答されてちょっと驚いた。まあ、それだけ気に入ってもらえたってことだろうし……いいか。

それから、朝食を食べ終え学校の準備も終わらせて、私は机の前に座っていた。やはり早く起きすぎたようで、時間にはまだまだ余裕がある。もしかして、真名も早起きさせすぎたかなと少々罪悪感に

襲われるが、当の本人は私の後ろで銃の手入れをしている。

朝から誰か訪ねてくることは無いと思うが……いいのか、そんな堂々と。

「さて、と……」

そんなことを言う私の横にも、鞘には入れているとはいえ夕風が立てかけられている。

机の引き出しを漁り、いくつか目当ての物を取り出して並べる。白紙のお札と筆と紐。紐は後で使うとして、まずはお札と筆だ。

深呼吸を繰り返して気を落ち着かせる。これからするのは、お札を作る作業だ。基本的なお札は、専用の紙に気を籠めて文字を書くことで、その文字に力を持たせる。お札作りを専門にする職人も、裏の世界にはいる。腕の立つ者が作れば、その分強いお札が出来上がる。

ただ、幅広い知識が必要となるので、私もあまり多くの種類は作れない。元からあるお札は買った方が早いから、それ以外の、新しい効果のお札を作るだけだ。数十年で、時間はかかったが作れるようになった。色々と研究の余地のある物が多いけれど。

筆に墨を付け、ゆっくりと書きつける。むらなく気を籠め続け、決して文字を間違えないように慎重に書いていき——出来上がる。

「ふう……」

戦闘で気を使うのとはまた違った使い方で、酷く疲れる。筆を仕舞い、出来上がったお札をもう一度確認する。書き間違えも無いし、気の状態もいいな。

今度は夕風を手に取り、それを分解する。手入れの時に分解して行うから、これ自体はいつものことだ。

違うのは、刀身の根元、柄に差し込む部分に、今作ったお札を巻き

つけることだ。

「刹那、何をしているんだ？」

「ん？ああ、見ていれば分かる」

鞘に戻し、見た目は何も変わらない夕凧。私は少しでも気を籠めて、口の中で言霊を唱えた。

一瞬の後に、夕凧の姿が消える。私の右手には、赤い勾玉が残っていた。

「それは…？」

「夕凧だ」

「は？」

首を傾げる真名。まあ、これだけ見ればそんな反応をされても仕方ないと思うが。

私は立ち上がり、今度はその勾玉に気を籠める。それだけで今度は、夕凧が私の手に握られていた。

「……」

「さっき作ったお札の効果なんだ。こうしておけば、持ち運びが楽だろう？」

また夕凧を勾玉に戻して、取り出しておいた紐を穴に通して輪を作る。それを手首に引っかければ、何の変哲も無いブレスレットだ。数十年も生きればいろいろ学ぶというか……得物を持って誰かを護衛するのは無理があると学んだ結果の行動だった。何があったかは聞かないでほしい。

「ん？……おい、真名。どうした、ハトが豆鉄砲食らった顔してる

ぞ」

「…………いや。本当に刹那なのかと思ってね」

「…………ああ。私は桜咲刹那だ。まあ、ちょっと変わったかもしれないが……」

手首に光る勾玉を撫でる。変わった、と思われても、仕方ないのかもな。

なんかかんやでのんびりと過ごしていた結果、早起きたわりに普段と変わらない時間に学校に来た。このちゃんは……まだ、来ていない。

正直、未来を変えようと思っているのに、踏ん切りがつかないでいる。いや、変える決意はもうしているのだが……今のこのちゃんに話しかけてもいいんだろうか。どうするのが一番いいのか、分からなくて……ただ、このちゃんの元気な姿を早く見たいと、それだけを思っている。

「おおっ!?!」

とりあえず、席に座って時間が過ぎるのを待っていたら、後ろの方で驚いたような声があがって振り向く。クーフェイが、期待に満ちた瞳でこちらを見ていた。

「…………」

周りを見る。いつもと変わらず、クーフェイが喜ぶようなものは無い。肉まんを売ってるのはあっちだし……何を見ているんだろう。

「刹那!!」

「おはよう、クーフエイ。どうかし——」

「勝負するアル!!」

「はっ?」

ズダダと駆けてきて開口一番、勝負。意味が分からず首を傾げれば

「その勝負、拙者もお願いしたいでござるな」

「長瀬!」

声が聞こえたかと思えば、シュタツと目の前に着地。やけに楽しそうに笑っている長瀬に、目を輝かせて構えているクーフエイ。何か話したのかと真名の方を見れば、面白そうに笑ってはいたものの首を振られた。

「クーフエイ、長瀬。いきなりなんだ? 勝負ならこの前も手合わせをしたばかりだろ?」

「刹那の気配が昨日と違うネ! だから、勝負アル!!」

「いや、意味が分からん」

「一晩にして随分と強くなったようでござるからな、是非とも手合わせ願いたい」

「いや、だから……」

はた、と思い当たって言葉に詰まる。

昨日、一晩で。私の身に起きたことを考えれば、何となく二人の言いたいことが分かる。見た目に変化は無くとも、内面に随分と変化が起きている。数十年分の記憶と、それに伴う経験。

……自分では分からなかったが、もしかしたらそういう意味で昨日の私と違っているのかもしれない。だから、真名は何度も聞いてきたのか。本当に刹那か、と。

「…………悪いが、今度にしないか？さすがにここだと…」

「なら外に行くネ!!」

「いや、これから授業が…」

「放課後ならいいでござるか？」

「今日は、ちよつと……」

まだこのちゃんに会うかとか、いろいろ考えたいのに。困り果ててどうしようかと思って、辺りを見る。騒ぎすぎて注目されていた。

「うゝ、じれつたいアルヨ!」

「つちよ!?!」

我慢できなかったクーフェイが拳を突き出してきて、驚きながらも右手で受け止め、そのままクーフェイの体のバランスを崩させる。

「うわつと」

体勢を立て直される前に、あと長瀬にまで何か仕掛けられる前に、二人の間を擦り抜け教室の後ろへ逃げる。口笛やら囃し立てる声が聞こえたが、この際無視だ。今はとにかく、あの二人を大人しくさせてこれからのことを――

「せつちゃん?」

「ッ…………!?!」

懐かしい声、普段から聞きなれた声。呼ばれ慣れた名前、呼ばれないようにしていた名前。

戻ってきた自分と、昨日までの自分が、頭の中で混乱する。声を聞こえた方を向けば、驚いた様子のこのちゃんと、目が合って。

「あ……」

声が出ない。目が熱くて、なんでだろう、手が震える。

「お、おはよ、せつちゃん」

緊張したみたいに、このちゃんがおずおずと声をかけてきて

『あ、せつちゃん。おはようさん』

目の前のこのちゃんよりも大人びたこのちゃんの声が、頭の中で木霊する。

面影が重なる。目の前のこのちゃんは間違いなく私の知るこのちゃんで、それがこの上なく——嬉しい。

「この、ちゃん……」

「——！！せつちゃ、うちのことわわっ！？」

気づいたら、このちゃんの手を握って、教室から飛び出していた。擦り抜けてしまった、掴めなかった右手の温かさに、涙が零れた。

半ばこのちゃんを引きずるようにして走っていることに気づいたのは、教室を飛び出してだいぶ走ってからだった。

「い、いめんっ、このちゃん——」

階段の踊り場で慌ててブレーキをかける。握っていた手を離そうと

すると、息を荒くしたこのちゃんが握りしめてきて、離せなかった。

「え、ええよ、大丈夫やから。にしても、せつちゃん足速いなあ」

「……………うつん、そんなことないよ」

静かに首を振る。ああ、でも、懐かしい。昨日まで確かに見ていた筈なのに……………遠目から見ていただけだから、なのかもしれない。正面から、こんなに近くでこのちゃんを見たのが、随分と昔の事になっている。

「……………このちゃん」

「うつん？」

「っこのちゃんー!!」

「わっ、せつちゃん……………？」

思わず抱き着いてしまった。だって、このちゃんが目の前にいる。私の前で死んでしまったこのちゃんが、こうして生きてる。

それがとても嬉しくて、そして同時に襲ってくる——後悔。

「護れなくてごめんっ、ごめん、このちゃん…私、私はっ……………」

「せつちゃん……………」

「っ絶対に、護る、から!!このちゃんを、護って、みせるから…」

……………」

目の前のこのちゃんは、私の目の前で死んだこのちゃんじゃないと分かっているのに。

溢れだす涙と言葉を止める術を、私は知らなくて。そんな私を抱きしめてくれるこのちゃんを、今度こそ護りたいと、護ってみせると、誓った。

「なあ、せつちゃん」

「ふっ……はい……」

「うちはな、せつちゃんがどうして泣いてるのかとか、分からないんよ」

「分からなくても、いいんです。私が、勝手に泣いているだけ、だから」

「それは、うちが嫌や。うちは、せつちゃんのこと知りたい。話せなかった時間の間に、せつちゃんがどんなことをしてて、どんなふうに思ったのか、知りたい」

「……話しますよ。時間はかかるし、話せないことも、あると思うけど」

「ええよ。でな、せつちゃん」

「なに、このちゃん」

「せつちゃんは、うちと友達で、いてくれるん……？」

不安そうな声だった。二年近くも、再会してからまともに話してないし、目も合わせていないんだから……当たり前なんだと、思う。ごめんね、このちゃん。ずっと、不安にさせて。もう、大丈夫だから。

「もちろん。私は、今も昔も、この先も——ずっと、このちゃんの友達です」

「——せつちゃん……！」

二人して抱きしめあって、喜びの涙を流しながら。私たちはしばしの間、互いを離すことは無かった。

大丈夫、今度は絶対に、護ってみせるから。

呼び出された日

過去に戻ってから（もう過去に戻ったのだと考えることにしている。一応は）翌日にしてこのちゃんと再会して色々と話した結果、私たちは二人揃って、一限目の授業をサボってしまいました。

「サボりなんて初めてやから、なんや楽しいな」

「すみません、このちゃん。私のせいで……」

「気にしないでええよ。うち、今すごく嬉しいんやから。あ、それと」

このちゃんと手を繋いで教室へ向かうために廊下を歩きながら話していたら、立ち止まってこのちゃんが言った。

「敬語は嫌や言つたやろ。せつちゃんがうちの護衛というのは分かったけど」

「う……ごめん、このちゃん。気を付ける」

「うん」

私は、このちゃんに自分が護衛の立場であることを明かした。何から護るのかは、まだ言えない。魔法の存在については、長の意向もあつて教えるわけにはいかない……私としては、教えてしまいたいだけだ。そうすれば、仮契約だって防げるから。

「でも、お父様も心配性やね。大丈夫やいうのに」

「……危険は、いつどこに潜んでいるか分からないよ、このちゃん。もしどこか探検したりするときは、私に言つてね？」

「オーケーや。あ、ならせつちゃんも図書館探検部に入ろうや。楽

しいえ」

「……入るのは、遠慮しておこうかな」

「えゝ、なんでや?」

「部活はちよつと。でも、探検の時は付き合いたいんだけど……い
いかな?」

「もちろん、大歓迎や!」

よかった、そう笑うと、このちゃんが不思議そうな顔をして私を見
つめてきた。何か、拙いことを言っただろうか。

「んー、せつちゃん、話し方変えたん?」

「え?」

「ずーっと標準語やし……それに……」

「それに?」

「なんて言うんやろ。落ち着いてる言うか……大人っぽい?」

「ああ……」

まあ、中身はプラス数十だから……言えないけど。

「練習してたら、これに慣れちゃって。大人っぽいかは分からない
けど……変、かな?」

「ううん、全然。せつちゃんはせつちゃんやしな」

「……うん」

そう笑ってくれるこのちゃんが、とても嬉しい。何だかまた泣いて
しまいそうで、私は随分と涙腺が脆くなってしまったようだ。

「さて、と。それじゃせつちゃん、いくえ?」

「いつでもいいよ」

教室の扉を前に、二人で顔を見合わせる。休憩時間とはいえ、朝に教室を飛び出してから丸々一時間は行方不明だったわけで……このクラスが騒がないはずが、無い。

二人で覚悟を決めたところで、このちゃんが教室の扉を開ける。少しでも被害を少なくするために、後ろの扉を、それも静かに開けてこのちゃんがこそそと侵入を試みようとしたところで――

「このちゃん、ちょっと待ってて」

「ふえ？」

言うが早いかこのちゃんを追い越して教室の中へ。どう細工したのか頭上から落ちてきた金ダライを誰もいない方向へ弾き、足元の糸は気を通して踏み抜く。左右から飛んできた矢は僅かに上体を反らして躲し、何故か極めつけに目を輝かせて襲って来たクーフェイと長瀬は、二人の間を擦り抜ける際に足をかけてさようなら。

サツと周りを見てばかんとしたクラスメイトを確認。畏の類はもう無さそうなので、教室の外で待機してもらったこのちゃんを振り向いた。

「もういいよ、このちゃん」

「ふわぁ……せっちゃん、凄いなあ。うち吃驚したわ」

「私も驚いた」

特に最後のクーフェイと長瀬に。あれは絶対にあの二人の独断だろう、このちゃん相手にもやったなら一発殴るところだ。

「え、えーと……？」

「桜咲、さん？」

「はい？」

戸惑い気味に呼ばれて、とりあえず振り返る。どういいうわけか、やけに注目されている——真名と目が合うと、声も無く諦めると言われた。何を、諦めると？

すこぶる拙い状況なのは分かって、私は一歩、その場から後ずさりする。

「せつちゃん？」

「このちゃん、私は今日はそのまま帰ろうかなと思う」

「え、なんでや？」

「……クラスメイトの視線が、怖い」

「んー……なあ、せつちゃん」

「うん？」

「諦めや」

「……………え？」

このちゃんまで、何を——！！？

次の瞬間、何故か押し寄せてきた人の波。え、待って、意味が分からない。

というかどうしてそんなにキラキラした目でこっちを見てくるのか教えてください。

「すごいすごい、ねえさっきの何！？」

「木乃香とどこに行ってたの？」

「ってか二人はどういう関係！？」

「二人ともなんか目が赤いけど、もしかしてもしかしちゃったの！？」

「運動神経が良いだけですこのちゃんとはちょっと用事があったでこのちゃんは普通の友達でもしかしちゃってません！！このちゃん助けて！！」

「あはは、せつちゃん頑張れ」

人波の向こうで手を振るこのちゃん。なんでこのちゃんは無傷なんですか!?

「つとと、さーて桜咲さん。色々取材させてもらおうか?」

「はっ?」

「桜咲さん、いつも教室でも一人だしあんま話してくれないから、こっちとしてはどういう心境の変化があつたのか知りたいんだけどね?」

「っ……」

そうか、それが原因か。つまり今までの私から考えられない行動をしたせいで、こつも注目を浴びるはめになったと。心底、後悔する。もう少し考えて行動すればよかった。といよりも、たつたそれだけで騒ぎすぎだろ。こんなに騒がしいクラスだつたっけ……だつたな。

「で、桜咲さん、答えは?」

「黙秘権を行使しますっ」

「いやいや、それは駄目だつて」

「駄目も何もありません。私から提供できる情報はこのちゃんとは友人関係であることだけです!」

「ほほう。木乃香と友達ねえ……木乃香、桜咲さんとはどういう関係なわけ!?」

「んー、せやなあ」

タタツとこのちゃんが人を掻き分けて私の隣までやって来る。えーつと……このちゃん?

「せつちゃんは、うちの大事な人や」

「おおおおお！！！」

「このちゃん！？」

なんでそんな曖昧な表現を！？はっ——！！

「えへっ」

目が合ったこのちゃんが、にっこりと笑う。これは楽しんでいる表情だ……昔も変わらず、このちゃんは人が困るのを——とりわけ、私が困るのを楽しんでいる節があつたが、何も今じゃなくともいいのに。

「桜咲さん、どういうこと！？」

「だから、違います——！！」

次の授業の先生が来るまで、私はこのちゃんとクラスメイトの方たちに振り回されることになるのだった。

放課後。私はこのちゃんと一緒に、買い物に来ていた。

「せつちゃん、見てみーこれ」

「あ、可愛い。猫かな？」

「犬もあるな」

女の子向けの雑貨屋に入って、このちゃんは終始ご機嫌にしながら歩き回っている。一方の私も、見慣れない物にちよつと楽しんでたりする。

こういうお店は、あまり入らなかったからなあ。このちゃんと仲良

くなつた後に、たまに出かけることはあつたけど……どうにも、場違いな気がして、居づらさを感じていたから。
今は、そんな気持ちも感じないんだけど。

「せっちゃん、次はあっち行こう！」
「うん」

そうして歩き回って、日が沈み始めたころ。私とこのちゃんは寮に帰った。

寮の廊下でこのちゃんと別れて、部屋へ戻ろうと歩き出したところで、声をかけられた。

「桜咲さん」
「はい？」

振り返って立っていたのは、茶々丸さん。絡繰さんと、呼んだ方がいいんだろうか。

「これを」
「……手紙？」
「はい」

差し出されたのは、一通の封筒。受け取って後ろを見ると、案の定そこに書かれていたのは『エヴァンジェリン』の文字。
エヴァンジェリンさんが、私に手紙か。あまりいい予感がしない。

「それでは」
「あ、はい。ありがとうございます」

一礼して去っていく茶々丸さんを見送って、今度こそ私は部屋へと

戻った。

「さて」

問題となる手紙の封を切り、中身を取り出す。入っていたのは一枚のカードだった。

「今夜十時に、桜通りに、か」

そういえば、エヴァさんとネギ先生が関わる最初の事件というのが、桜通りの吸血鬼だったはずだけど……詳しい話は、聞いていないから知らないんだよな。まあ、呼び出されているのは確かだし――

「行くしかない、か」

手首の勾玉を撫でて、私はそつと手紙を机の引き出しに仕舞った。

密かな対決の日

夜、九時五十五分。待ち合わせの五分前きっかりに桜通りについた私は、その場で立ち止まり考えていた。ちなみに服はジャージ上下。何事も無く終わったならランニングして帰ろうかと思ったのだ。

「終わらなければ、どうするのがいいんだろうな……」

何事があった場合、私はどうするのが一番いいのだろう。なまじ未来を知っている分、過去に無い出来事が起こると弱いみたいだ。私は、エヴァンジェリンさんに呼び出されたことなど、無かったのだから。

——それを言うと、教室でいきなりクーフェイや長瀬に襲われたことも、無かったのだが。

「——来たか、桜咲刹那」

「こんばんは、エヴァンジェリンさん」

街灯の上に立つエヴァンジェリンさんを見上げる。すたつと地面に降りてきてくれて助かった、見上げたまま話すのは、正直つらいものがあるから。

「絡繰さんから手紙を受け取りましたが、いったい何の用ですか？」

「なに、お前に興味があつてな」

「興味……？すみませんが……」

エヴァンジェリンさんは同性愛者だったのだろうか？否定はしないが、さすがに困ってしまった。

「私に、その趣味はありません」

「阿呆か！私にもない！！」

「そうですか、それならいいんです」

本気で安堵。知らないだけでその趣味がある可能性も否定できないだけに、余計に不安になってしまった。

「ったく——で、お前、いったい何があつた？」

「またその質問ですか……」

今日一日で、クーフエイや長瀬にも言われているし。ああ、あの二人といつ手合わせをしよう。近いうちにしておかないと、また教室で襲われ——

「おい、聞いているのか」

「……聞いてます。何があつたか、ですけど……正直、お答えできません」

「ほう」

「言つて信じてもらえるのかわかりませんし、あまりたくさんの人に話すようなことでもありませんから」

「ということは、知っている奴が少なくとも一人はいるわけだな？」

「……まあ、そうですね。その人も、全部を知っているわけでは無いですけど」

真名に話したのは、とても大まかな表面上の事だけ。私が未来を知っているのは知っているが、その未来がどんなものを、あいつは殆ど知らない。

「それが分かれば、お前が腑抜けになつた理由も分かるのか？」

「……腑抜け？」

「そうだ。昨日までのお前と、今日のお前。力は増したようだが――
——実につまらない」

「つまらない、ですか。ちなみに、エヴァンジェリンさんから見ると、私はどう変わったんですか？」

「気になるか？」

「多少は」

真名たちはみんな、感覚で私が変わったのを感じているだけで言葉にはしてくれないし……このちゃんは、大人っぽいと言っていたけど、まあ、それは仕方ない変化だとも思うけど。これで子どもっぽいと言われた方が、正直複雑だ。

「そうだな、まあお前にとって分かりやすい例えをするなら――

刀だな」

「刀……」

「昨日までのお前が、触れる物全てを斬る抜身の刀だったのに対し、今日のお前は鞘に仕舞った上に、それに布を巻きつけているような感じが。触れる物を絶対に傷つけないようにしている」

「……そこまでですか？」

「じゃなければ、クラスの中の馬鹿騒ぎを、ああも容認してやるか？」

「あー……」

なるほど、確かに昨日までの私なら無視を決め込んでいるな。そう考えると、エヴァンジェリンさんの例えにも納得がいく。誰も傷つけないように、か。

「無関係な人を傷つけるわけには、いかないですし？」

「だとしても、たった一晩で随分な変化だ。私が知りたいのは、何

がお前をそこまで変化させたのかだよ」

「そう言われても、私は何も言えませんよ。それに、私はつまらないんじゃないかったですか？」

「ああ、つまらん。つまらんから、聞き出すついでに壊してしまおうと思っただけ——！！」

「ッ！」

言うが早いのか、投げられたフラスコから氷が襲いかかってくる。これは、エヴァンジェリンさんの魔法……？

その場から飛び退き、回避。地面が凍りついているが、腑に落ちない。同じ氷の魔法でも、彼女の魔法はもっと強力だったはずなのに。

「エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「力が、制御されているんですか？」

「っなぜ知っている！？」

やはり、か。登校地獄の呪いとは別の、学園結界が原因なのだろう。ということは、先ほどのフラスコに入っていた液体が魔法の触媒で、それがなければ戦えないということだ。

単純に考えるなら、触媒を消費してしまうのが一番いいかもしれない。触媒が無くなれば、魔法を使えなくなるわけだし。

「まあ、そうもいかないんでしょうけど」

背後から急接近してくる気配。突き出された右拳を半身捻って避け、逆にその腕を掴んで投げ飛ばす。

エヴァンジェリンさんの横に着地した茶々丸さん。二対一、か。

「卑怯、と言ったら、どうしますか？」

「魔法使いの戦闘に従者はつきものだからな。まさか、それすら忘れて腑抜けになったか？」

「いえ、言ってみただけですよ」

厄介、ではあるが……どうにかするしかないのも、また事実。

右手の勾玉に気を籠める。元の姿に戻った夕凧を握りしめ、左手を添えた。

「む……武器を持っていたか。何も持っていないから、どうしたかと思っていたが……」

「持ち運びを楽しみました。この方が便利ですから」

「なるほど。いつの間にそんな芸当ができるようになった？」

「……いつでしょうね」

惚ける。いつかと言われたら、未来だと答えるしかないから。ピクリとエヴァンジェリンさんの唇が引き攣った。どうやら、気分を害してしまったようだ。

「全く、お前は随分と憎たらしい性格になったな。まさか、それがお前の本性か？」

「まさか。私の根本は、何も変わっていませんよ」

「ならば、なんだと言っ？」

「……教えません」

斬りかかる。前に出た茶々丸さんに対し、躊躇いも容赦も無く刀を振り上げ、振り下ろす。躲されたそれが制服を掠り、ボディを露わにするのを確認する前に、頭上から降り注ぐ魔法の嵐に舌打ち。

「神鳴流、斬空閃……！」

頭上へと気を飛ばして相殺する。茶々丸さんが身を屈めて接近してきて、左腕を突き出すのを、自分で後方に飛ぶことで威力を弱める。受け身を取って立ち上がり

「斬岩剣!!」

地面に向かって技を放ち、コンクリートを粉碎する。細かな石粒となったコンクリートは技の威力に押されて、迫って来ていた茶々丸さんに襲いかかる。

「これは――」

「捕縛結界、五角楼」

一瞬の隙を生んだ茶々丸さんの背後に回り込み、捕縛する。対象にお札を貼り付け動きを封じ、またその周りを五つの見えない壁で囲い外から遮断する捕縛用の結界。これで少しは、時間を稼げるだろう。

「ほう、東洋の結界か。さすがにそれは解除に時間が必要かな？」

「はい、マスター。申し訳ありません」

背後から聞こえた声にその場を飛び退く。可笑しそうに愉快そうに笑うエヴァンジェリンさんがいた。

「だが、何故だ？最初のお前の一撃は、茶々丸を壊すつもりのようなだったか」

「クラスメイトですから、腕を斬ってしまうのはどうかと思いました。それに、そうしたらエヴァンジェリンさん、怒るんじゃないかもしれませんか？」

「なんだ、私を怒らせたくないのか？」

「ええ」

力を制御されているとはいえ、エヴァンジェリンさんの相手は出来るなら避けたい。彼女がそれを良しとしてくれるとは思えないけれど。

「どうしたら、見逃してくれますか？」

「お前の身に変化を齎した原因が分かれば、とりあえずは考えてやらんでもない」

「原因を聞いても何だかんだで襲ってきそうな言い方ですね…」

「ふっ、どうかな」

ああ、そうだ。思いついたようにエヴァンジェリンさんが笑う。

「お前のやる気を出させてやるうか」

「……何をやる気ですか？」

「今、ここで私を倒せなければ——近衛木乃香の血を貰う」

「……」

エヴァンジェリンさんの言葉は、私の予想した通りだった。過去の私なら激昂して斬りかかるところだろう。予想していたとはいえ、実際に言われると私もブチリと切れるものがあつた。

「どうした。お前のその鞘に仕舞って布にくるんだ刀で斬れるなら、存分に来るがいい。近衛を守りたいならな」

「——ええ、そうさせてもらいます」

ただし

「刀は鞘から抜きますけれどね」

怒りではなく、理性で、冷静に、布を払って鞘から引き抜く。あくまで静かに、怒りで湧き上がる力は理性で制御して、私は刀を振るおう。

「神鳴流——斬鉄閃」

放つ、同時に走り避けたエヴァンジェリンさんの前に躍り出て、右手に握った刀を振り抜く。

「はっ、隙だらけだよ」

「どうでしょうね」

左手を突き出し、身を躲したエヴァンジェリンさんからいったん距離を置くために飛び退く。

「なんだ……？」

驚いた表情のエヴァンジェリンさん。彼女の頬からは血が流れていた。

そこを狙った左手は、確かに回避された。したと、彼女は思っていた。

「なるほど、気を使っているのか」

「あたりです」

斬魔掌、弐の太刀。手の先に気を集めて剣として、相手を斬る技。青山宗家ゆかりの方にしか伝承されない弐の太刀だが、私はそれを教わる機会に恵まれた。

「二刀流というわけか、面白い」

「私は、つまらないんじゃないですか？」

「ああ、撤回しよう。お前は昨日までのお前より——面白くなった
！！」

頭上と、何時の間に仕掛けたのか私の周りに転がされたフラスコから、魔法が放たれる。

「氷爆」

「っ斬空閃！！」

咄嗟に、頭上へと気を放ち相殺する。撃ち漏らしはあるが多少のダメージは覚悟の上で、その場から飛び退き回避しようとして、飛んだ矢先で背後に現れたエヴァンジェリンさんに捕まった。

「凍れ」

「ッあああああ！？」

至近距離で放たれた魔法に、私は無様に地面に落とされる。

「ぐっ、うっ……」

叩き付けられた痛みに呻き、腕に力を籠めて起き上がろうとして、失敗した。右腕と左腕の一部が凍りついている。頬や体の一部が他にも冷たいことから、おそらくそこも凍っているんだろう。

体の自由が利かず、視線を巡らせてエヴァンジェリンさんを探して、彼女は目の前に降りてきた。

「この程度か。まあ、なかなかに楽しませてもらったよ」

「こっちは、楽しくないですけど……」

出来るならこのまま終わりにしたいのだが、そうもいかない。私はまだ、彼女を倒せていないから。

「まだ立ち上がれるか？」

「ええ、まあ……貴方を倒さないと、いけないですから」
「近衛の為か？」

不意に、不機嫌そうに彼女の眉間に皺が寄って、見下ろされる。冷え切る体に浅く呼吸を繰り返しながら、私はそんな彼女の変化に僅かに首を傾げた。

「どうして、あの女の為にそうまで頑張れる」

「それは……」

「昨日までのお前もしくり、今日のお前も、表面上は変化しようとも結局は同じだ。何を思って、そうまでする」

「……エヴァンジェリンさんには、無いんですか？」

「なに？」

「護りたいもの」

背中に意識を集中させる。大丈夫、私はやれる。まだまだ、やれる。

「護りたいもの、だと？」

「ええ」

「はっ、悪の魔法使いが何かを護る、だと？有り得んな」

「そうでしょうか。私には、貴方の護りたいものが、少なくとも一つは分かりましたけど」

「……なんだと？」

「茶々丸さん、傷つけたら、怒りますよね？」

大切だから、傷つけられたら怒る。それがたとえ物でも、人でも。家族でも、友人でも。大切だから、護りたいと思う。

「私は、このちゃんを護りたいんです」

だから飛ぼう。護る為に翼を広げて、今度こそ。

「もう二度と、傷つけたくないから」

翼を広げる。気が溢れて、パキパキと体に張り付いた氷を剥がしていく。

そうして私は、高く高く、飛び上がる。

「護ると、決めたんです」

そのためなら、誰よりも高く飛んでみせる。今度こそ。

分かり合えた日

空で、エヴァンジェリンさんと相對する。右手には夕風、左手にはまだ気は集めず、夕風に添えて。

くだらない、そう彼女は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「近衛木乃香を護りたい、か」

「ええ。そのためなら、私はいくらでも立ち上げれます」

「本当に、それほどの価値があの子にあるのか？」

「……怒りますよ？」

このちゃんを侮辱するのは、許さない。

「まあ、待て。確かにあいつは、桁違いの魔力を持っているようだが……所詮は何も知らない、ただのガキだ」

「真祖の貴方からすれば、私もただのガキでしょうに」

「違うな。お前は少なくとも、覚悟を持っているよ」

彼女にとっての違いは、そこなんだろうか。分からないけれど、たぶん褒め言葉と受け取っていいんだよ、な？

「魔力を持っていようと、それを知らなければただのガキ……いや、魔法使いどもからすれば、いい餌だな」

「激しく同意しますね。私の役目は、そんな輩からこのちゃんを護ることでもありますから」

「無駄なことだな。近衛が何も知らないうちは、いくらでもそいつらは沸いてくる」

「全部斬り捨てるまでですよ」

それだけでこのちゃんを護れるなら、むしろ安いくらいだ。強くなればいい話なんだから。

「……やはり分からんな。そうまでして近衛を護ってどうするといふのだ？」

「言っている意味が、よく分かりませんけど」

「いくら護ろうと、お前は受け入れてもらえないということだよ」

自然な動作で、エヴァンジェリンさんがフラスコを投げ氷の矢が放たれる。上空へと回避して、彼女の頭上で刀を構えた。

「斬鉄閃!!」

ひらりと躲される。それは承知の上、急下降してエヴァンジェリンさんに接近し、至近距離で放った。

「斬岩剣!!」

「甘い！」

ギシッと妙な音と感覚。エヴァンジェリンさんを前に、刀がそれ以上進まない。視線を巡らせれば、彼女の指先から細い糸が放たれ、私の体に巻きついていった。

「人形使い……忘れてました」

「忘れるな、阿呆が。さて、私の方もそろそろ触媒が切れるんでな、やり易い方法を取らせてもらおうか」

「ッ……」

覗き込まれた目に、吸い込まれる。そうして次に気づいたとき、随分と懐かしい場所にいた。

「これは……」

「幻想空間だ。ここでは私の力も制御されず使えるからな、さっきまでのお遊びとは違うぞ」

「……………それは、私にも言える事ですよ？」

「なに？」

足に気を籠めて一気に距離を詰めて、エヴァンジェリンさんの懐に入り込み、刀を振るう。右下から振り上げてそれを避けられたなら、次は左手で彼女の脇腹を突く。彼女の右手に集まる魔力が爆発し、それを気に同時に飛び退いた。

気を集めていてよかった。でなければ、左手が吹っ飛んでいたんじゃないかと思う。

「ずいぶんと無茶をするな」

「これくらいは、まだいけますよ。幻想空間は、実体には影響しませんから……………死なない限り」

「確かにそうだ。だが、もし腕がなくなれば……………」

「動かなくなるかも、ですね」

もちろんそれは困るので、気を付けるけれど。

「神鳴流決戦奥義——」

それにあまりお喋りをしている余裕も無い。明日だって普通に学校があるし、わざわざ互いに傷つけあうことをしようとは思っていないから。

夕風を構え、意識を集中させる。彼女には悪いけれど、一気に決めさせてもらおう。

「真・雷光剣!!」

「エクスキューションーソード!!」

不思議なことに、ぶつかり合った技は学園祭と同じ技。激しい光と力のぶつかり合いで、ガラガラと建物が崩れていく音を聞きながら、夕風を握った右手の力を弱めることは絶対にしない。

「ははっ、予想以上だよ、刹那!!」

「そうですかっ…!」

こっちは結構いっぱいですよ。

「その力で、お前は近衛を護るのか？」

「ええ!」

「——受け入れられないとしてもか!？」

「っ……」

押してくる力が強くなる。これは、エヴァンジェリンさんの叫びなんだろう。彼女の抱える何かの、重みなんだろう。

「人外である私とお前が、本当に受け入れてもらえると思っているのか」

「っええ!」

「友達だからとも言つつもりか？今日のお前はなぜ、あんなにも笑っていられた？」

「笑ったら、いけないんですか？」

「さあ、どうだろうな。ただな、仮初の幸せに溺れる姿は、見ていられん」

「ッ……」

「仮初が崩れた時の絶望を味わうのは、お前にはまだ早い。だから、

私が壊してやろう」

この戦いは、彼女なりの優しさなのだろう。私なんかの数十倍の年月を生き抜いてきた彼女には、今日の私が束の間の幸福に酔っているように見えただろう。

烏族のハーフでありながら、表面だけは人間のふりをして、その幸せを得て。その事実を受け入れられず拒絶されたとき、私がどれほど絶望するのかは、想像したくも無いことだ。

この葛藤は、このちゃんにも分からない。人は自分に無いものを真の意味で理解することなど出来ないから。

でも、それでも私は――

「信じているんです!!」

「つなにを...!？」

「今日の幸せが、嘘じゃないと！私は、このちゃんを信じているんです!!」

「……信じたところで、裏切られるだけだとは思わないのか？」

「思いません。だって、このちゃんは――」

『せーっちゃん』

『はい、なんですか？お嬢様』

『むう、またお嬢様言っただな。嫌や言っただやんか』

『あはは...ごめんなさい、このちゃん』

『うん！んで、あんな』

『はい』

『うちらずーっと、親友でいような』

『もちろん』

「私の、親友ですから」

ずっとずっと、そう信じている。

光が弾けて、音が遠のく。土煙の向こうで、倒れた影を見つけて――私の意識もまた、消えて行った。

「（いい匂い……）」

そう思っ、目が覚めた。窓から差し込む太陽の光に目を細めて、体を起こす。二段ベッドではないふかふかのベッド。ここは、どこだ？

「おはようございます、桜咲さん」

「あ、茶々丸さん……」

「……？」

ガチャリと扉が開いて入ってきた茶々丸さんに、思わず慣れ親しんだ名前の方を呼んでしまったのに気付く。不思議そうに首を傾げた彼女に笑って誤魔化して、ベッドから降りた。

「ここは、エヴァンジェリンさんのお家ですか？」

「はい。昨夜の戦闘後、桜咲さんは倒れたまま起きませんでしたので、マスターが連れて帰るようにと」

「そうですか……ありがとうございます」

「いえ。リビングでマスターがお待ちです。どうぞ」

案内されるまま着いていくと、大仰にソファ―に座ってお茶を飲むエヴァンジェリンさんがいた。

「起きたか」

「おはようございます、エヴァンジェリンさん。とりあえず、ご迷惑おかけしました」

「仕掛けられたのはお前だと言うのに、変なことを言う奴だ。まあいい、座れ」

促されて、彼女の向かいの席に座る。すぐに茶々丸さんがお茶を出してくれて、どうも、と小さく会釈した。

茶々丸さんがエヴァンジェリンさんの後ろに控える。さて、と口を開いたエヴァンジェリンさんに、私は身を固くした。

「昨日の勝負だが、覚えているか？」

「それが……幻想世界で戦ったのは覚えているんですが、その後は全く。結局、勝敗はどうなったんですか？」

「幻想世界だけで見るなら、私の負けだ」

そうやけにあつさりと、彼女は負けを認めた。といっても、私も彼女が倒れた後に気を失っているから、本当の意味で勝てたとは言い難い気がする。

いくらエヴァンジェリンさん相手とはいえ、あれだけで気絶してしまうとは……弱く、なったのかなあ。

「情けない……」

「ん、どうした？」

「いえ。それで、幻想世界だけだというのは、どういうことですか？」

「……お前は、そのまま実体でも気を失っていたんだよ。それに対して私は意識もあったし、茶々丸もいたからな。お前を殺すことが

出来た」

「それじゃあ……私の、負けてことですか」
「そうなるな」

ふむ、そうするとどうしようかな。今この場で彼女に斬りかかって、もう一度戦おうか。卑怯だとは思っけけど、彼女を倒さないといけないが、ちゃんが襲われてしまうし。

「物騒なことを考えるなよ？別に、近衛を襲ったりはせん」

「あ、そうですか」

「……分かりやすいくらいに殺気が収まったな。わざとか？」

「半分は」

深く深く、呆れたように溜息を吐かれる。

「まあいい。それより、負けたんだからお前の身に何があったのか話せ」

「そんな約束は、してないじゃないですか」

「近衛を襲わないと言っているんだ。代わりの代償だよ」

「……」

理不尽だなあ、相変わらず。まあ……信じてもらえるかも分からない話で、このちゃんの安全を得られるならそれでいいのかな。

「大まかな部分だけでいいですか？」

「それで分かるなら構わん」

「では……私は、今から数十年先の未来の記憶を持っています」

そんな出だしで、真名より詳しく、けれど詳細——事件や、出来事はあまり触れず、ただ漠然と、そして私にとって一番重要な部分

の、このちゃんが死んだ事実について話した。これで納得してもらえなかったなら、諦めてもらうしかない。私はこれ以上のことを話すつもりは無いから。

「……なるほど、それでか」

「何がですか？」

「一晩で人が変わるには十分な事だな。それに、貴様が気絶した理由も分かった」

「…気絶した、理由？」

それは、どうということなんだろう。

「お前の話から考えるなら、今のお前は中学二年生の桜咲刹那の体に入った、数十年後の桜咲刹那ということになる」

「そう、ですね。はい」

「つまりお前の体と精神には、数十年分の経験の差がある」

「………はい？」

「おかしいと思ったんだ。あれだけ実力があれば、もっと余力がありそうなもののに、呆気なく倒れるからな」

エヴァンジェリンさんの話は、つまりこういうことだった。

私の中身は、記憶とそれに伴う経験を持つが、私の体にはそれが無い。

記憶から習得していた式の太刀を使うことが出来たが、体にとってはぶっつけ本番。それも出来る精神に出来ない体が無理矢理引きずられる形となってしまう、体にすぐに限界が来た。

要は足の遅い体が足の速い精神を追いかけて走った結果、ペースを保てず置いてきぼりを食らったと。

「……………修行のやり直しか、あ……」

「まあ、実際の経験が中身にある分、成長も速いだろう。死ぬ気で頑張ることだな」

「そうします…」

でも、それならばしくは気を付けないといけないな。忒の太刀なんて使ったら、またすぐに倒れそうだし……。

「で、だ。刹那。お前はこれからどうするつもりでいたんだ？」

「このちゃんを護りますよ」

「それはもう聞いている。お前は、近衛にすべてを話すのか？」

「……魔法については、長の意向がありますから」

「貴様の存在についてはどうする？信じているんだろう？」

私を試すように、エヴァンジェリンさんが問いかける。私の存在、ハーフであることを、このちゃんはまだ知らない。

「翼については、まだ言いませんよ。魔法にも近いことですし……」

「所詮は言い訳だな。どれほど綺麗ごとを並べたところで、結局は拒絶されるのが恐いんだろう？」

「……このちゃんは、大丈夫ですよ」

ちよつとだけ、嘘が混ざる。それを敏感に感じ取ったエヴァンジェリンさんの瞳が、剣呑に煌めいた。

こういう事は、似た境遇だけに、誤魔化せそうにないかなあ。

「……………認めてくれるって、信じてます。そりゃ、ちよつとは恐いですけど……………そう思うのも、仕方ないんじゃないですか？」

過去に一度でも迫害を、拒絶を受けたなら、それはいつまでも消えない。根強く、根深く、心に突き刺さってその事実を忘れさせない。

なら、私はそれに恐怖したままでいるしかないのか？そうやって自分を偽って、それこそ仮初の幸せを喜ぶしかないのか？

昔の私ならそれも仕方ないと諦めただろう。卑屈になって、自分の存在を卑下して。でも、そうすると、このちゃんが怒ったから。だから私は、違うと叫ぼう。

「その恐怖を飲み込んで、踏み出さないと……先へは、進めませんから。私は、このちゃんを信じると決めたんです。だって、友達ですから」

「友達、ね……仲良しこよしがいつまで続くかな」

「友達でいる限り、何時までも続きますよ」

「ふうん……」

認めようとしてくれないエヴァンジェリンさんに、困る。だって目の前の彼女が、まるで拗ねている子どもに見えてくるから。

私の数十倍は生きてるのになあ。やっぱり、見た目が原因なんだろうか。

「あの、エヴァンジェリンさん……」

「なんだ」

「そんなに疑うんでしたら、その……私と、友達になってくれませんか？」

「はあっ？」

本気で驚くエヴァンジェリンさんに、私は顔が熱くなる。正直、改めてこういう事を言うのは初めてで、結構恥ずかしいものなんだと思う。このちゃんも明日菜さんも気づいたら友達だったり親友だったり師匠だったりで、私から行動を起こすことはしなかったしなあ。自分からこうして言い出せるようになった分、成長はしているんだな。うん。

「なぜ私が……」

「仲良くしてもらいたいですし……それに、エヴァンジェリンさんが、悪い人じゃないって、知ってますから」

「私は、悪の魔法使いだぞ？」

「知ってますよ。でも、私のことを心配してくれたりする、優しい人です」

「んなつ……!!」

あ、赤くなつた。真っ向からこういう事を言われるのは、照れるみたいだ。私としては、そんな彼女を見られて嬉しいんだけど。

「それで、どうですか……？」

「……ふんつ。まあ、そうだな。お前の言っ友達こつこがどんなものか、付き合つてやらんでもない」

「そうですか」

つまりは、友達になつてくれるということだ。私としては、十分に喜ばしいことだ。

「あの、ちゃちゃま……えっと、絡繰、さん」

「茶々丸で結構です。桜咲さん」

「あ、それじゃ私も刹那で……えっと、それですね。よかつたら茶々丸さんも、友達になつてくださると……嬉しい、んですか……」

きよとん、と茶々丸さんが驚いたように見えた。無表情であまり変化はしないけれど、それでもそんな風に見えたんだから、それでいい。

「構いませんが……」

「よかった。こつこつのもあれですけど…よろしく願いしますね」
「ふんっ……」

……にしても、エヴァンジェリンさんって、あれだろうか。あの…
ツンデレとかいうやつ。

「今、何か妙な事考えたか？」
「いいえ、何も」

恐いくらいに睨まれて、本気で焦る。エヴァンジェリンさんの前で、
下手なことは考えない様にしよう……。

常識人に会った日

一晚、泊めてもらったことと、怪我の手当てをしてもらったお礼に朝食を用意したら、エヴァンジェリンさんにとても喜ばれた。

茶々丸さんも、栄養の摂取は出来ないものの味覚はあるようで、美味しいと言ってくれたので嬉しかった。二人とも、特にエヴァンジェリンさんは日本茶が好きなようだし……今度、和菓子でも作ろうかな。喜んでくれるといいんだけど……。

「むむむっ、こ、これはどういうことだ!？」

「あ、せつちゃん」

そのまま二人と学校に行くことにした。制服は、茶々丸さんが持ってきてくれたんだけど……いつの間に。私が寝ている間にだろうか？

とりあえず教室に入ると……どうしてだろう、また注目された。このちゃんが何だか安心した表情で駆け寄ってきたので、どうしたのかと思いつつも笑いかける。

「おはよう、このちゃん。どうかしたの？」

「んとなー、朝せつちゃんと一緒に学校行こうと思ったら、いないって真名ちゃんが言うてどうしたんかなあって思ってたんや」

「ああ、そっか。ごめんね、このちゃん」

「ええよー。あ、エヴァちゃん、おはようさん」

「……ああ」

ふいっと顔を背けて自分の席に座るエヴァンジェリンさんと、それを追う茶々丸さん。クラスに馴染むのはまだまだかかりそうだなあ。

「桜咲さん、これはいったいどういうこと？何があったの？」
「へ……？」

マイクを片手に突撃してきた朝倉さんに、後ずさる。周りの人たちも気を抜いたら昨日のように雪崩になって襲つてきそうで怖い。とりあえず、朝倉さんの言っている意味が分からなくて、首を傾げて聞いた。

「何のことですか？」

「マクダウエルさんのことだよ。茶々丸さんも一緒に三人で登校つて、何があったのさ？」

「何が、つて言われても……」

話せるわけが無い。一晚戦った拳句、朝ご飯を一緒にしましたなんて。

「あ、うちも知りたい。な、せつちゃん。なして？」

「えっと、その……」

このちゃんにまで聞かれて、答えに詰まる。どうしよう、なんて言えばいいんだろう……誤魔化すか？

「今日は、ちょっと早めに出て……散歩しながら学校向かってたら、偶然、ばったり……」

「そうやったんかあ。ほな、せつちゃん。今度はうちも一緒に散歩する」

「う、うん。いいよ、今度は一緒に行こうね」

「んー、それじゃただの偶然、かあ。一夜かけてあんなことやこんなことがあったりは」

「しません!!」

何を期待しているんだ、この人は!?

その日の放課後、手合わせを求める長瀬とクーフェイから逃げるように教室を飛び出して、私は寮への帰り道を歩いていた。

このちゃんは占い研究部に出ると言っていたので、一緒にはいない。ただ、お願いしてお守りを持ってもらっている。見た目は普通のお守りだが、中に入っているのはお札の一つで、このちゃんに危険が迫ったとき、私にそれを知らせてくれるものだ。これなら遠くにいなくてもこのちゃんの危険に駆けつけることが出来る……一番いいのは、やはり一緒にいることなだけけれど。

それはそうと、この後はどうしようかな。寮に帰って、せっかくだしエヴァンジェリンさんのところにお邪魔しようか。あれ、でもエヴァンジェリンさんって学園から監視されてたり……まあ、問題があるなら向こうから言ってくるか。友達に会いに行くだけなんだし……。んー、でもよく考えると、エヴァンジェリンさんは魔法使いなんだよなあ、西としてもそれはあまり良くない……いやでも、今の私は西の裏切り者扱いだし……うん、とりあえず、友達に会いにすることで誤魔化そう。友達なのは事実なんだし……うん。

深く考えすぎると動けなくなりそうだから、考えるのはやめておく。考えすぎて自分で抜けられなくなるのは昔からの悪い癖だしなあ。

「と、あれは……」

考えから抜け出したところで、見覚えのある後ろ姿を前方に見つける。千雨さんだ。

本でも読んでいるんだろうか、足元への注意がちょっと不足してる

……あ、つまずいた。見捨てることもできず、私は足に気を集め一気に千雨さんの後ろに立ち、倒れかけた体を引き戻した。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ありがとう」

「どういたしまして」

お礼を言いつつ、どこから現れたんだ？とばかりに千雨さんが私を見つめている。まあ、私との距離は結構あったから、気づいていなくても可笑しくない。

にしても、そんなに不思議そうな顔をしなくても……ああ、そうか。認識障害があるから誰も気にしていないけれど、突然、こんな風になる人がすぐ傍に現れるのは、普通の人からすればおかしいことなのか。確か千雨さん、認識障害が効きづらい体質だったか。だから、こんなに不思議そうにするんだろう。

「寮へ帰るんですか？」

「ああ」

「よかったら、ご一緒してもいいですか……？」

「…別に、かまわねえよ」

本を閉じて鞆に仕舞う千雨さん。それから歩き出して、けれど特に何か話すことも無く私たちは歩く。

「……なあ」

「はい？」

不意に、千雨さんが口を開いた。

「今朝、絡繰たちと一緒に学校来てただろ？」

「ええ、まあ」

「どう思った」

「……」

千雨さんの問いかけの意味。聞いた彼女はどこまでも無関心を装いながら、鞆を握る手を緊張に震わせて。

私はと言えば、彼女の問いに答えを出すこともせず、首を傾げた。

「長谷川さんは、どう思っんですか？」

「……」

問い返されるとは思わなかったのか、千雨さんはぴたりと足を止めてしまった。私もつられて立ち止まり、一分だけ先に進んでしまった体を振り向かせる。頼りなく彷徨う瞳を見上げた。

「聞きたいのは、茶々丸さんの性格ですか？それとも、茶々丸さんが、ロボットであることですか？」

「っ分かるのか！？」

千雨さんが知りたいのは、後者。誰もが茶々丸さんをクラスメイトとしか認識していない中で、彼女をロボットだと考えるのか、否か。

「……ロボットがクラスメイトなのは、おかしいですか？」

「普通に考えておかしいだろ？いや、絡繰だけじゃない、他の奴らもなんか変だろ。異様にガキみたいだったり、やけに運動神経が良すぎたり……極めつけは」

「子ども先生」

そうか、千雨さんはこういう事にも悩んでいたのか。

私たちの世界からすれば、子どもが力を持っていようと何ら不思議

ではない。子どもが大人を倒すのが普通に有り得る実力世界だから。けれど、彼女はそうではない。普通の、この麻帆良では通用しない外の常識を持った存在だ。彼女にとって、私たちの世界で起こりうることは、有り得ないの一言なのだろう。

「おかしいだろ。なんで誰も不思議に思わないんだよ。法律とか常識とか、いろいろあるだろ……」

私を話を通じる人間と捕えたのか、途端に千雨さんは弱弱しく言葉を紡ぎ出した。

「誰も何とも思っていない。変だろ。科学技術も、身体能力も、麻帆良の外と比べたら異常すぎる。あちこちで普通に乱闘だつてあるし、みんなそれを危ないとも思わないで観戦するし……意味がわかんねえよ。なんなんだよ、私がおかしいのか？ 私だけが、変なのか？」

「おかしく、ないですよ」

千雨さんは、おかしくないです。そう言うと、彼女の表情が途端に泣きそうに歪んでしまった。どうしよう、さすがにこの場で泣かれるのは困るなあ。

「しょうがない……長谷川さん、ちょっと失礼しますね」

「は？……おわっ」

よいしょ、と千雨さんの後ろに回って横抱きにする。身長差はあるけれど、まあこれくらいなら平気だ。

「で、長谷川さん。ちょっときついかもしれないですけど」

「あ……？」

「貴方の言う『異常』を、体験してみてください」

言って、私は気を集めた足で思い切り地面を蹴った。それは明らかに、彼女の言う異常な速さだった。

とりあえず、千雨さんは私と真名の部屋に招待した。真名はまだいないので好都合。

ぐったりとしていた彼女を座らせて、私といえば、お茶を淹れいる最中。ちなみに日本茶。お茶菓子は饅頭。

「どうぞ。落ち着きました？」

「あー……あんまり」

「そうですか」

お茶を飲んで一息吐く。少しの沈黙を挟んでから、私は笑った。

「で、どうでした？異常体験は」

「普通にありえねえよ……」

「まあ、麻帆良は私みたいなことが出来る人がそこらじゅうにいて、しかもそれが容認されているということですよ。裏事情もいろいろありますけど……それは、聞かない方が身の為かと思えますから」

「危ないこと、なのか？」

「生死を賭けるくらいには」

「……」

そういう世界だから、むやみやたらに人を巻き込めない。けれど、放っておいたら千雨さんはまた長い時間を一人で悩み続けることになるし、そう思うと見捨てられなくて。

力になれるなら、なつてあげたいと思ってしまった。

「……愚痴があつたら、いつでも話に来てください。話を聞くくらいは、できますから」

「いいのか？」

「長谷川さんが、私みたいな異常でもいいと、言ってくれるなら」

「……あー、その……悪かったな」

「構いませんよ。普通と違うのは自覚してますし……それに、それを誇りにも思ってますから」

「誇り？」

「人と違うけど、そうだからこそ出来ることもあるんです」

誰かを護つたり、とかね。

「ああ、それから」

不意に思い立って、机の引き出しからお札を一枚取り出す。このちゃんにあげた物の予備で、効果は同じだ。

それを小さく折りたたんで、お守り袋に入れてから、千雨さんに渡す。

「どうぞ」

「んだよ、これ」

「危険が迫つたら、私にそちらの場所が分かるようになってるんです」

「……こういう仕組みか、聞いてもいいのか？」

「聞かない方が良いですね。ただ、そういうものだけ思ってくれば」

「……もし、本当に私に危険が迫つたとして、お前は どうするっていうんだよ」

「やるだけのことをします」

私に、やるだけの力で、護る。このちゃん以外まで護るつもりなのかと言われれば、そうだと言うしかない。本当にそんなことが出来るのかと言われれば——出来ると言うしかない。

だって、見てしまったら。触れてしまったら。私は、その人までも護りたいと思ってしまったから。

「……桜咲って、見かけによらずお人よしなんだな」

「あはは……本当に、自分でもそう思います」

せめて私の手の届く分だけは、護りたいなと。

図書館島初探検の日

「図書館島？」

『そうなんや〜』

テストまで残り数日、エヴァンジェリンさんの自宅にお邪魔していた私の元に、このちゃんから電話がかかってきた。

なんでも、図書館島にある魔法の本を探しに行くとかなんとか……そういえば、この期間にこのちゃんが行方不明になって、探し回ったような……まさか、これが原因か？

「このちゃんも行くの……？」

『うん。パルとのどかは地上で連絡係やけどな。せつちゃん、この前、探検に一緒に行く言うてたし、どうかな思って』

「……私も行く。待ち合わせは？」

『七時に図書館島入口や。必要な物はうちが持っていくから、手ぶらでええよ〜』

「うん。それじゃ、絶対に先に行かないでね」

『了解や〜』

さて、図書館島ね……あそこ、色々と仕掛けがあるって聞いてたけど、魔法関係の仕掛けとは違うのかな……？

「近衛木乃香か？」

「ええ。図書館島に、魔法の本を探しに行くそうですよ」

「魔法の本ねえ……」

くつくつと喉を鳴らしてエヴァンジェリンさんが笑う。

「本当にあるんでしょうか？」

「まあ、あったとすれば十中八九、あの爺の仕業だな」

「……学園長、ですか」

「知らず知らずに魔法に関わらせていくつもりだろうな。でなければ、あんなクラス構成は有り得んよ」

「それは、まあ……そうでしょうね」

昔は、私も何も不思議に思わなかったけれど。こうして見ると、ネギ先生の為に用意したと言ってもいいクラスだ。

エヴァンジェリンさんも私の話を聞いて改めて調べてみたようだけど、揃いも揃って潜在魔力や身体能力がおかしいそうだ。優秀な従者になれると言っていた。

……このちゃんも私も、まんまと利用されたってことなんだろう。

「さて、お前が行くなら、私は桜通りにでも顔を出すとするか」

「テスト前ですし、程々にしてあげてくださいよ。勉強もしないといけないでしょうから」

「分かっているさ。お前のせいで溜めていた魔力も消費してしまったしな、暫くはばれない様にまた集めなおしだ」

「……私のせいじゃないですよ」

喧嘩を売ってきたのはそっちだ。

図書館島の入口までやって来ると、このちゃんが手を振っていた。

「せつちゃん」

「このちゃん。他のみんなは？」

「先に侵入口に行ってるえ」

「（……侵入口？）」

どういうことか、案内されるままに着いていけば言葉の意味はすぐに分かった。図書館探検部しか知らない入口……つまり、本来なら入ってはいけない場所に入るという事なんだろう。まあ、仮にも魔法の本……普通の場所には無いが。

「あ、桜咲さんだー」

「なになに、桜咲さんも一緒に行くの？」

「ええ、まあ」

明日菜さんに佐々木さん。そういえば、バカレンジャー五人の為とか言ってたけど……嫌な予感がした。

「むっ、刹那！勝負アルヨー！」

「今日は逃がさないでござる」

やっぱりか。バカレンジャーということは当然のようにクーフェイと長瀬もいるわけで……今は相手をしている場合じゃないのに。

「これから侵入するんだろ？騒ぐと見つかるぞ」

「そう言って、また逃げるアルー！」

「……テストが終わったら、手合わせするから」

「約束でござるよ？」

「ああ」

仕方ない。いつまでも逃げられないし……体に経験を積ませるには、修行あるのみだ。

……それから、さつきから気になっていたんだが、どうしてネギ先

生がいるんだろう。確かに行方不明時はネギ先生も一緒にいなかったが…… ああ、それもこれが原因だったんだ。

「このちゃん、ネギ先生はどうして？」

「んー、明日菜が連れて来たんや」

「……そう」

もしかして、ネギ先生と明日菜さんは既に仮契約を？分らないな……様子を見るしかないか、それとも、明日菜さんをネギ先生からどうかして切り離すか——。

「それじゃみなさん、行くですよ」

「おー」

…今は、こっちに集中するか。

進んでいくうちに、徐々にトラップが物騒になっていく。盗難防止の為とはいえ、遣り過ぎだろう。

後方から打たれる矢を払って、つくづくそう思う。

「このちゃん、足元にトラップがあるよ」

「ふえつ、わ！ほんとや。ありがと、せつちゃん」

「物騒だし、気を付けないとね」

「せやね」

ちなみに、ここまでの道中で分かったのは、ネギ先生が魔法を使えないことと、神楽坂さんが現時点では仮契約をしていないが、魔法の存在は知っているらしいこと。

図書館島が危険な場所であることは割と知られているから、対策としてネギ先生を連れて来たんだろうが……魔法を使えないネギ先生じゃ、ただの足手まといだ。
とりあえず私は、このちゃんを優先的にトラップから守りつつ、着いていくことにしよう。

「着いたー!!」

「わっ、なにこれすごい!!」

それからひたすら進み続けて……ジャージで来てよかった。道なき道ばかりだから、服が汚れてしまったし。

というよりも、ネギ先生……魔法の本が珍しいのは分かりましたから、落ち着いてください。このちゃんに魔法の存在がばれます。

そう思っている間に、他の人たちが次々と本に向かって走り出す。嫌な予感がして、とっさにこのちゃんの腕を取った。

「このちゃん!」

「ふえっ?」

ガコン、と石橋が割れる。どうにかこのちゃんを引き寄せたおかげで、私とこのちゃんは巻き込まれずにすんだ。

「せつちゃん、ありがとう」

「ううん。それより、これって……」

「ツイスター、ゲーム……?」

『その通り!!』

ゆっくりとした動きで、石像が動き始めた……え、どうしようこの状況。

『魔法の本が欲しければ、僕の質問に答えるのじゃ。ただし!!』

悲鳴を上げてパニックに陥る佐々木さんたち落ちた面々をよそに、石像は私とこのちゃんを指差した。

『そちらの二人もゲームの舞台に降りてもらうのじゃ。じゃなければ、ゲームへの挑戦も認めん』

「……ど、どないしょ、せつちゃん……」

「畏だと分かり切っている場所に、下りるつもりは無い」

『ならば、永久にこの地下を彷徨うんじゃない。ゲームに勝てたなら、本と出口への近道を教えてやるぞい』

なんとしても、私たちを……いや、このちゃんを、その場に下した
いらしい。このちゃんを連れて脱出するのは簡単だが、その場合は
他のみんなを犠牲にすることになる。

「せつちゃん、下りよ?」

「このちゃん……」

「大丈夫やつて。ゲームに勝てばいいんやから」

「……うん」

……大丈夫だ、少なくとも、すぐに命が危うくなるようなことは無いはず。このちゃんを抱えて、石版の上に降り立つ。石像が満足そうに笑い声をあげた。

——腹が立つ。

『では、第一問』

ゲームの内容は、英語を日本語訳したものを、ツイスターゲームの要領で踏むだけ。ネギ先生のヒントもあって順調に進んでいたんだ

けれど――

「お、さ――る!?!」

『ハズレじゃな』

間違えた瞬間、石像が巨大なハンマーを振り下ろす。石版が割れ暗闇がぼつかりと口を開けて、私はこのちゃんを庇うように抱きしめた。

「せつちゃ――」

「大丈夫」

後から一緒になって落ちてくる瓦礫を気で弾きながら、私たちは暗闇へと落ちて行った。

「ふうむ、どうしたもんかのお……」

まさか、刹那君が一緒におるとはのお。彼女の成績もあまりよろしくないから、一緒に勉強してもらったのはありじゃが……。

「もう少し、影から守つて思っていたんじゃがの」

今回の目的は、ネギ君と生徒を地下に落とすことで、そこで集中的に勉強してもらい2・Aの最下位を脱出させること。そして、パートナー候補でもある彼女たちとネギ君に交流を深めてもらうつもりだったんじゃが……いやはや、困ったぞい。

「ん、でも刹那君も候補の一人じゃし……むしろ、よかったかのお

「？」

彼女がネギ君の味方になったなら、力強い仲間となるじゃろう。そう考えれば、予想以上の成果ともいえるの。

「ふおおおっ……」

さてさて、テストまでの三日間、みっちり勉強してもらおうじゃないか。

地底図書室で勉強会の日

さて、どうしようかな。

石像によって地下に落とされた私たちは、幸いにも湖に落とされ無傷で済んだ。気絶したこのちゃんを抱えて近場の陸地上がり、同様に落ちてきた皆さんを陸地に連れて行く。

……これ、下手すれば溺れて死んだんじゃないか？

「ん、う……」

「このちゃん、目が覚めた？」

「……あ……せつちゃん……」

「うん」

気が付いたこのちゃんに安堵の溜息。怪我は、と聞くと小さく首を振った。大丈夫なようだ。

次々と他の人も目覚めていき、一様にこの空間に驚いていた。綾瀬さんの話だと、ここは幻と言われた地底図書室……なんだとか。生きて帰れた人はいないというが、それなら誰がその存在を他の人たちに伝えたんだろう。

「大丈夫ですよ、皆さん！絶対に脱出できますから！！」

力強くメンバーを励ますネギ先生。落ち込んでいても仕方が無いと、とにかく勉強することになった。

都合よく食料や全教科のテキスト、キッチンにトイレと揃っている。学園側が一枚噛んでいると思った方がいいかな。

「幸せや〜」

「このちゃん……」

バカレンジャーが勉強会する傍ら、このちゃんのはのんびり読書に勤しんでいる。私は私で、勉強しつつこの地底図書室を探索していた。水浸しの本は、どういいうけか濡れてもいないし痛んでもいない。やっぱり魔法が関わっているんだろう。明らかに魔法を示唆する本が無いことに本気で安心する。

というよりも、そろそろ本気で長に連絡を取った方が良いかもしれない。西からすれば裏切り者の私が、下手に連絡を取って長に不利益があつては困ると思っていたが……少なくとも、修学旅行までに長にこのちゃんの状況について説明しなければ。修学旅行で長に届けられる親書も、強硬派の人間を随分と刺激するものだったし――

「せつちゃん、何してるん？」

「っなんでもないよ」

気づけば、このちゃんが後ろから私を覗き込んでいた。いけない、考えに集中し過ぎていたかな……。

「ご飯の準備が出来たんや。食べよ〜」

「うん」

食事は、これで四回目。外ではもう一日が経っているし、テストは明日だ。そろそろ、脱出を考えた方がいいころだろう。

「あれ、他の人たちは？」

「水浴び行くて言ってたえ。呼んでくるから、先に食べててな」
「うん」

今度のご飯はサンドイッチ。手近な一つを取って食べつつ、耳を澄ませてこのちゃんが戻るのを待っていると、少し遠いところで騒ぎが起こったらしい。騒がしさに顔を顰めて、最後の一欠けらを口に放り込んで飲み込み、立ち上がる。

このちゃんに危険が迫った感じでは無いけれど、良い状況では無い。そう思ったところで、そのこのちゃんがこっちに向かって走ってくる。

「このちゃん！何かあったの？」

「せつちゃん！！そ、それがな……」

このちゃんの話によると、地下で私たちを落とした石像が現れたという。それで、このちゃんはみんなの荷物を取りに戻ってきて、これから逃げるところ。

「それじゃ、急ごうか。このちゃん、背中に乗って」

「え？」

「私の方が、足速いから。急ぐんだよね？」

「う、うん！」

逃げるだけなら、このちゃんを背負った方が楽だ。これが戦ったりだと話は違うけれど。

荷物を持ったこのちゃんを背負って水辺へ走り、他の人たちと合流する。あとは逃げるだけ、と。

『ま、待つんじゃない』

「やだよー」

「ありました、滝の裏側に非常口です」

「え……？」

非常口なんて、そんな危険から逃れるための物があるんだ。思わず本気で驚いてしまった。

扉に書かれていた問題を、本を持ったクーフエイが答えて中へ入る。長い螺旋階段が上へと続いていた。

「せっちゃん、うち一人で行けるえ？」

「……大丈夫？」

「もちろんや」

追いつかれた場合の事を考えて、このちゃんの言葉に従って別れて階段を上る。壁を壊して追いかけてくる石像を眼下に捕えつつ、途中中の壁に書かれた問題を解いて上を目指した。

「あつた！地上への直通エレベーターです！！」

「これで地上へ帰れるの？」

ネギ先生の言葉通り、前方にはエレベーター。これに乗りさえすれば、逃げ切れるか。

そう思ったが、大急ぎで全員が乗った次の瞬間、ブーツとブザーの音が鳴った。

『——重量オーバーです』

「うつそおおお！？」

悲痛な叫びをあげて騒ぎ出すみんなが服を脱ぎだしたりする中、思う。もしも、このちゃんたちが行方不明時にこれを使って脱出したなら——一人、人数が多い。

それはつまり、どんなに頑張ろうとも誰か一人が降りなければ、助からないという事だ。

「ぼ、僕が降ります!!」

私の思考の答えを出すかのように、ネギ先生が叫びエレベーターから降りた。魔法は使えずとも生徒を守る意志は称賛しますが……それは、明日菜さんが許さない。

「あんたを置いていけるわけないでしょ!こーすんのよ!!」

ネギ先生をエレベーターに引き戻し、魔法の本を石像に向けて投げる。石像がぐらついた。落ちるまでは行かなかったが、今エレベーターが動けば逃げられただろう。

『重量オーバーです』

「なんでえええ!?!」

『ふおおお、逃がさんぞ』

「や、やっぱり僕が——」

無情な機械音に、石像の手が伸びてくる。立ち上がり盾となろうとしたネギ先生の襟首を掴んで、明日菜さんに押し付けた。

「えっ」

「せつちゃん…?」

エレベーターを出た瞬間に、ボタンを押す。扉が閉まり始める向こうで、呆然としていたこのちゃんが慌てて手を伸ばしてきた。

「せつちゃ——!!」

チンツと何とも軽い音を立てて、扉が閉まる。ガコンと動き出した

音を後ろで聞いて、笑みが浮かんだ。

「よかった」

『自分を犠牲にして他を逃がすか。しかし、儼に勝てると思うておるのかのお？』

石像が話しかけてくる。伸ばされた手をひらりと躲して、勾玉を夕凧に戻した。

「貴方の思い通りにはさせませんよ——学園長」
『ふお！？』

斬るのは石像ではなく、階段。崩れた足場ごと落ちていく石像に背を向けて、閉じたエレベーターの扉を切り刻む。

上へと長く続く暗闇。これを上って行けば、地上へ戻れるんだよな。

「行くか」

刀を勾玉に戻し翼を広げて、私は地上へと飛び始めた。

「せつちゃん！せつちゃん、せつちゃん！！」

「木乃香、落ち着いてってば！！」

「いやああああ！せつちゃん、せつちゃん！！」

開かないエレベーターの扉を叩いて、木乃香が泣き叫ぶ。私はそれを抱きしめる様にして、どうにか押さえつけていた。

「離して明日菜！！せつちゃん、せつちゃんがあああ！！」

「お、落ち着いてください、木乃香さん」

「せつちゃん！！」

私たちを助けるために、エレベーターを降りた桜咲さん。何の躊躇も無いその姿に、私たちは止めることも出来なかった。

どういうわけか地上へと戻ってきたエレベーターはうんともすんとも言わず、扉は閉じたまま一向に開こうとしない。これじゃあ、助けに行くことも出来ないじゃない。

「せつちゃ、せつぢゃああん……」

「木乃香……」

泣きながら桜咲さん呼び続ける木乃香。幼馴染なんだと、教えてくれた。事情があつて中学で再会してから話せずにいたけれど、つい最近、桜咲さんの方から話しかけてもらえて、以前の関係に戻れたんだと話していた。

本当に嬉しそうに話していて、話を聞いたときはこっちまで嬉しくなった。その桜咲さんが、あんなよく分からない相手を前に一人で行ってしまった。木乃香が泣き叫ぶのも無理は無いと思う。

「と、とにかく助けをよばなきゃ——」

まきがそう言った、瞬間。ガシャンツ、とエレベーターの奥で音がして、みんな揃ってビクツと体を跳ねさせる。

まさか、さっきの石像が上まで追ってきた？じゃあ、桜咲さんは——そう青ざめる私の目の前で、ガンガンと何度か叩き付ける音がした後、ゆっくりとエレベーターの扉が開かれた。

「っはあ……」

扉をこじ開けて現れたのは、桜咲さんだった。

「せつちゃん——っ!!」

「このちゃん!よかった、無事でわああああ!？」

力の抜けた私の腕から抜け出して、木乃香が桜咲さんに飛びつく。受け止め損ねた桜咲さんが木乃香と二人揃ってその場に転がった。

「せつちゃん、せつちゃん!!」

「……ごめんね、このちゃん。心配かけて」

「ひぐっ、ほんまや。せつちゃんの、あほ……」

「うん、ごめんね」

謝りながら、桜咲さんは優しく木乃香の頭を撫で続けていた。とても大切そうに目を細めて、木乃香を見つめる彼女を、私たちは無言で見つめることしか出来なかった。

その翌日、テストは無事に終了し、結果は2 - Aのトップで終わることが出来た。遅刻した時は慌てたけど、ネギも無事に先生になれたし。

ただ、ちょっと気になるのが桜咲さんで。あの後、木乃香が落ち着いてからエレベーターの中を覗いたら、凄いことになってた。エレベーターの底に大きく穴が開いていて、扉の内側は酷く凹んでいた。どうやったのか聞いてみても、結局何も教えてもらえなかった。っていうか、それ以前にどうやって地上まで登ってきたんだろう。まさか桜咲さんまで魔法使いとか、そんなわけないし……ああ、わか

んない。

そして、桜咲さん実は頭が良かったらしい。普通に上位に食い込んできていた。何時の間に勉強してたのか、それもちょっと気になった。

春休みの帰省した日

春休みに入る数日前、長に手紙を出した。

このちゃんの現状と、麻帆良の対応。詳しいことを会って話したい旨を伝えると、春休みに京都へ戻るよう返事が来た。

寮にこのちゃん一人を残すのは不安だったが、その間の代わりの護衛を寄越すということだし、安心していいだろう。

そうして私は今――

「お久しぶりですね、刹那君」

「はい、長。お久しぶりです」

長と、そして数名の重役たちの前にいる。

穏健派、強硬派、それらが一同に会したこの場で私が話すことになるとは思わなかった。

「手紙の方は、読ませてもらいました。木乃香の現状は、思わしく無いようですね」

「はい。東側には、木乃香お嬢様に魔法を知らせないことを伝えてあるにも関わらず、あちらは子どもとはいえ、魔法先生を同じ部屋に住まわせています。さらには、日常的に魔法による恩恵を受けて生活している有様です。あちらが、木乃香お嬢様に配慮しているとは、考えがたいでしょう」

「なんと……」

「だから奴らに任せるのは反対したんじゃない！」

穏健派が頭を抱え、強硬派が憤った。長も苦い顔をしている。

「長、どうするつもりです？」

「即刻、お嬢様を連れ戻してこちらで教育をするべきです！」

強硬派が長に詰め寄り、怒鳴るようにして言う。それに対して、穏健派が慌てだした。

「いや、ここは早急に東と和解の場を設けるべきだ」

「木乃香お嬢様への配慮をしつかりしてもらわんといかん」

「なぜこちらが下に出る必要がある！和解など認められるか」

意見のぶつかり合い。

穏健派は東と争うのを恐れて、早急な和解を主張し、強硬派は和解はせずに、このちゃんを連れ戻し教育することを主張する、か。

……正直、どちらも賛成しがたいな。穏健派の和解には賛成するが、強硬派の言うとおりこちらが下に出る必要は無い。だからといって、強硬派に賛成も出来ない。このちゃんの意味を無視して、こちらの都合で振り回すのは、したくない。

「長、どうするのですか！？」

「……」

双方が長に意見を求めた。長は穏健派の人間だし、賛成するならそちらだろう。けれど、今そちらに賛成されて、本当に和解されたら、西が崩壊してしまう。それは、止めなければならないことだ。

「——発言、よろしいでしょうか」

「刹那君……ええ、許可します」

「では……長は、木乃香お嬢様に対する東の反応を見るために、お嬢様を東へ預けたのですよね？」

「え……」

長が戸惑った。それに気づかずに重役たちが私の言葉に驚き、意識を向けてくるうちに言葉を続ける。

「あくまでお嬢様には魔法を知らせず一般人として、その上であらがお嬢様にどのような対応を取るのか。また、お嬢様があちらに對してどのような印象を持ち、生活するのか……それを、確かめたかったのだしたよね？」

「なんと……では、全て考えの上であつたということですか？」

「敵を騙すにはまず味方から、という言葉もありますし……長も、ご自分の愛娘を危険かどうか判断しかねる場所に送るのは、さぞお心を痛めたことでしょう。せめてもの想いで、長は私を木乃香お嬢様の護衛と、その様子を報告させる要員としてお選びくださいました」

「そついうことであつたか……」

各々が勝手に納得して、一先ずは場の空気が収まりをみせる。おそらく、これで今すぐに決断する必要はなくなるだろう。少なくとも、議論をするだけの余裕は双方にあるはずだ。

「剎那君……」

「申し訳ありません、長。話した方が、いいかと思ひまして……勝手な真似を致しました」

「……いえ、君の判断に間違いはなかつたでしょう。ありがとうございます」

困惑した長に頭を下げる。まあ、私が話したのは全て——嘘なんだけだ。

そのまま話し合いは一度お開きとなり、部屋を出たその足で私は、長の私室へと向かっている。

先ほどのことについて、話さなければならぬから。

「長、刹那です」

「どうぞ、入ってください」

「失礼します」

襖を開ければ、中には当然ながら長一人。部屋に入り扉を閉めると、盗み聞き防止に防音のお札を張った。

「……先ほどは、申し訳ありませんでした」

「いえ、むしろ助かりました……刹那君の言葉が無ければ、あの場でどちらかに賛成する必要があつたでしょう」

考えがあつて行動したのであれば、その報告について議論してから決断ができる。もちろん、双方が議論の余地ありと判断した場合のみだが……思惑がどうあれ、一先ずは良かったと思つておこつ。

「それにしても弱りましたね……お義父さんからは、問題ないと言われていたんですが……」

「あちらの考えの全てが、こちらに伝わるわけではありませんから……ですが、おそらくは木乃香お嬢様を、ネギ・スプリングフィールドの従者にと、考えているのではないでしょううか」

「……ナギの息子、ですか」

最後にぽつりと呟かれた長の言葉は、聞こえなかったことにしよう。うん。

私にとって重要となるのは、ネギ先生が誰の子どもではなく、ネ

ギ先生が魔法使いであることだから。

「麻帆良の認識障害もあって、現状ではお嬢様に魔法の存在は気づかれていません。ですが、お嬢様の周りに危険が蔓延しているのもまた事実です。強硬派の中には、既にお嬢様を狙って学園への侵入を試みる者もいます」

「……護衛は、難しいですか？」

「いえ、現状では私で対処できます。ですが……今後の事を考えれば、長にもご決断いただきたいところです」

「そう、ですか……」

襲ってくる輩なら、いくらでも斬り捨てられる。それだけで護れるなら安いものだ。

「——木乃香お嬢様に、魔法の存在を教えることは、ありませんか」

「それは……」

言って、すぐに決断は無理だろうなと思う。長はこのちゃんに、平和な世界で生きてほしくて麻帆良に逃がしたのだから。このちゃんの魔力が、利用されない様に。誤算は、敵がここだけではなく、向こうにもいたことだけけれど。

「魔法の存在を知っていれば、逃げやすくも避けやすくもなります。それに、知らず知らずに巻き込まれるようなことも、無いでしょう」「巻き込まれる可能性が、あるのですか？」

「あります」

現に、神楽坂さんは魔法の存在を知り、関わってしまっているから。殆ど流れて、危険性も知らずに。

それは一步間違えれば、このちゃんだったかもしれないことだ。

「魔法の存在を知ったうえで、お嬢様に選択してもらうべきでは無いでしょうか。関わるも、関わらないも——私は、お嬢様の望みを叶えるために、全力を尽くすつもりです」

このちゃんが望むなら、茨の道を切り開く剣となり、敵から護る盾となろう。どんな手段になろうとも、絶対にこのちゃんを護ってみせる。

この先が私の知らない未来に繋がっていようとも、私は負けるつもりは無い。

「刹那君……」

長は静かに呼吸を繰り返し、やがてゆっくりと言葉を吐き出した。

「——私も、このままではいけないのでしょうかね」

長が何を思ったのかは分からないけれど、その心に何かしらの変化があったのだけは分かる。そうして長は一度、情けないと呟き力の抜けた笑みを見せた。

「決断しなければならないと分かっても尚、木乃香のことをすぐに決めることが出来ない。けれど、僕の方でも一度、改めて考える時間をください」

私はその言葉に小さく頷く。長では無く、詠春様——このちゃんの父親の言葉のように思えた。

そうして長は笑みを収め、じっと私を見て言った。

「今しばらく、木乃香をお願いします。まだあの子には、普通の生活を満喫してもらいたいんです」

「承知しました」

どう変わるかは分からない。けれど私は、出来るだけのことをやるだけ。

「あ、そうだ」

それはそうと、せっかく京都に來たんだし、エヴァンジェリンさんにお土産でも買って行こうか。このちゃんには京都に來たこと内緒にしてるけど、彼女には伝えてある。

言った瞬間に不機嫌な顔をしていたけれど……エヴァンジェリンさん、日本の景色が好きだったはず。何をお土産にしようかなあ。

桜通りの吸血鬼事件の日

「せつちゃん、おはようさん」

「桜咲さん、おはよー」

「おはようございます、桜咲さん」

「おはよ、このちゃん。神楽坂さんに、ネギ先生も」

今日から新学期が始まり、私たちは三年生になる。

このちゃんたちと一緒に学校へ行くことが増えて、明日菜さんやネギ先生とも話すようになった。ただ困っているのが、図書館島のことを未だに時々聞かれること。

たぶん、私が魔法を使えるのかどうかと疑っているんだと思うけれど……どうしたらいいんだろうなあ。

「そっぴや聞いた？あの噂」

「噂？」

時間は過ぎて、今は教室で着替え中。新学期早々、まずは身体測定が行われるので、そのためだ。

「あ、知ってる。桜通りの吸血鬼ってやつでしょ」

「えーっ、何それ何それ？」

「せつちゃん、知ってる？」

「う、うん、一応」

桜通りの吸血鬼、満月の夜に寮の桜並木に現れる謎の存在。まあ、うん。知ってるも何も友達だしなあ。

「こんなかな!？」

「いや、このちゃん…違うと思うよ」

チュパカブラって…なに？

「先生、大変やー! まき絵が、まき絵がつー!」

「何! まき絵がどうしたの!？」

外で待っていたネギ先生に向けられた声に反応して、全員がそろって騒ぎ出す。

ちらりとエヴァンジェリンさんを見ると、にやりと笑い返されて…

…ああ、やっぱり貴方が原因ですか。

更に時間が過ぎて、夜。私たちは少し買い物に、宮崎さんだけ先に寮に帰ると別れた矢先、心配になった明日菜さんが送ってくると言っ
て追いかけて行った。

「んー、うちも心配やし…ちょっと行ってくるわ」

「あ、このちゃん。私も行く」

「ほな、一緒にいこー」

昨日の今日で、エヴァンジェリンさんが動くかは分からないけれど…
…いや、でもそういえば、この前から頻繁に夜に出かけてるよう
な。あれ、もしかして遭遇しちゃったり

「（しますよねー）」

明日菜さんに追いついたところで、ネギ先生がボロボロの制服姿の

宮崎さんを抱えていた。というよりも宮崎さん、ほぼ裸……これは、どうしよう。このちゃんはわけが分からないでいるから、上手くフオローしないとだし……。

「とりあえずこのちゃん、宮崎さんにこれ着せてあげて。何も無いよりは、良いと思うから」

「う、うん。せやな」

ベストを脱いで宮崎さんに着せる。下は、どうしよう。着せるよりかけた方がよかったかな。
ものすごい速さで走っていくネギ先生は、まあ足が速いってことにして、とにかく明日菜さんも一緒に連れて寮へ――

「ま、待ちなさいよ!」

「神楽坂さん!」

え、走って行ってしまった……もしかして、明日菜さんもう引き返せない場所まで行ってしまってるんじゃない。ああ、いや、十中八九そうなんだろう。自分から関わりに行くなら、私にもどうしようもない、かなあ。

「あ、明日菜――!」

「このちゃん、今は先に宮崎さんを寮に連れて行こう。服、着せてあげないと」

「う、うん……でも……」

「ネギ先生は神楽坂さんが連れてくるよ、たぶん」

宮崎さんを背負って、見えなくなった二人を心配するこのちゃんの手を握り、寮に向かって歩き出した。

「ほい」

「ありがとうございますー」

宮崎さんの同室者がまだ帰ってきていなかったの、仕方なしにこのちゃんたちの部屋へ連れてきた。ベストは回収して、今は応急処置にバスタオルを巻いてもらってる。

「にしても、いったい何があったんや？」

「それがー、私もよく覚えて無くて……すごく恐かったのは覚えてるんですけどー」

「……まあ、怪我が無くてよかったですね」

「はい。ありがとうございますー」

たぶん、エヴァンジェリンさんが血を吸う前に、ネギ先生が駆けつけたんだろう。運が良かったと言わざるを得ないな。

「にしても、明日菜たち遅いなー。大丈夫やるか？」

「どうだろう。もう少し待っても来ないようなら、私が探しに行ってくる」

「駄目や。それやと、せつちゃんが危ない目にあうかもしれん」

「でも……」

「駄目や」

……図書館島の一件以来、このちゃんが頑固です。何も言わずに飛び出したのは、拙かったかな……。

結局、ネギ先生が泣きながら帰ってきたのは、それから一時間ほど経った頃だった。

翌日、授業中のネギ先生は常にぼうつとしている。昨日のエヴァンジェリンさんとの戦闘が相当に堪えたようだ。

そのエヴァンジェリンさんもサボタージュだとか。舐められてるなあ、ネギ先生。真祖相手だし勝てないのも無理は無いと思うけれど。

「あの……つかぬ事をお尋ねしますが、和泉さんは十歳の年下の男の子がパートナーなんて、嫌ですよね……？」

「えっ……」

何を言い出すかと思えば……ネギ先生、改めて見ると迂闊すぎる。パートナーとはつまり、魔法使いのパートナーのことを言っているんだろうが……大丈夫なんだろうか、一般人ばかりの生徒に対してその発言は。

昔の私も、どうして不思議に思わなかったかな……いや、不甲斐ないとは思っていたけれど、でも改めてみると酷い。色々と頑張ってますごいことはしてたけれど、それもな……。

そのうちチャイムが鳴ってネギ先生が出て行くと、なぜかパートナーに立候補する人が多数。というよりネギ先生が王子様って、どういう噂だろ。よく分からない。

「刹那さん」

「はい？」

騒ぎの中、茶々丸さんに声をかけられる。いつも一緒にいるエヴァンジェリンさんは、サボリ中なのでやっぱりいない。

「放課後、マスターが来るようにと」

「そうですか……場所は？」

「私がお連れしますので、教室でお待ちください」

「分かりました」

用事、か。なんだろう。昨日の事を聞くにはちょうどいいけれど…。

「なあなあ、せつちゃん」

「ん、なに？」

「せつちゃんは、ネギ君のパートナーってどう思う？」

「……そうだね……」

笑みを浮かべて、私は言った。

「遠慮しておくよ」

約束の放課後、鞆に入っている物を確認して私は茶々丸さんと一緒に教室を出た。このちゃんは、何やらクラスで企んでいるそうでそれを手伝うんだとか。

「ん…来たか、刹那」

「こんにちは、エヴァンジェリンさん。ずっとここでサボってたんですか？」

「いいや？屋上で日向ぼっこもしていた」

「……つくづく、物語の吸血鬼から想像できませんね……」

「不老不死が日光ごときでやられて堪るか」

連れて行かれた先で、エヴァンジェリンさんが退屈そうにしていた。彼女にとっては授業も退屈なものなんだろう。

「それで、どうかしたんですか？」

「あの坊やに私の正体が知られたんでな。少々騒がしくなると、教えてやろうと思ったただけだ」

「……もう十分、騒がしいです。とりあえず、このちゃんだけは巻き込まない様に気を付けてください」

「お前は巻き込んでもいいのか？」

「……私、ですか？」

どうしてそこで私の名前が出てくる。

「私は、このちゃんを護るので忙しいです」

「その割に長谷川千雨の相手をしたりと、余裕がありそうだが？」

「……なんで知ってるんですか」

「さあな」

エヴァンジェリンさんの言うとおり、確かに時折、千雨さんの話し相手をしてたりはする。今まで話せる相手がなかったんだろーし、時間があれば話しているが……基本、寮の部屋で話してるんだけど。どうやって知ったんだろー。

「はあ……巻き込むって、具体的にどうするつもりですか？」

「そうだな、仮契約でもしてみるか？」

「本気で怒りますよ？」

「はっ、冗談だ」

このちゃんに仮契約はさせないようになっている私が、仮契約してどうするんですか。エヴァンジェリンさんの冗談は冗談に思えないから怖い。

そう思っていたら、エヴァンジェリンさんが何かを投げってきて、思わずキャッチしてしまった。これは、ネックレス？

「念話用の魔法具だ。私が呼んだらすぐに来い」

「なんで私に……？」

「私はお前を気に入っているんだよ。常に着けておけ、いいな」

「……分かりました」

気に入っている、か。私にそこまで価値があるとは思えないんだけどな。

受け取ったネックレスを首に下げ、制服の下に隠す。その時、ふと思い出したことがあって、ああと声をあげた。

「そうだ、エヴァンジェリンさんに渡したい物が……」
「ネギー……！」

叫びながら、明日菜さんが建物の影から現れる。こちらに気づくとバツと身構えてきた。

「ほう、神楽坂明日菜か」

「あんた達！……え、桜咲さん？」

「どうも、神楽坂さん」

一緒にいた私に気づいて、明日菜さんは戸惑ったように表情を変えたけれど、すぐに首を振ってエヴァンジェリンさんたちを睨んだ。

「ネギをどこへやったのよ？」

「……む、知らんぞ」

「えっ」

明日菜さんは、ネギ先生を探していたらしい。エヴァンジェリンさんが犯人という予想は外れたみたいだが。

昨日の件で明日菜さんもエヴァンジェリンさんを警戒しているみたいだ。エヴァンジェリンさんは、自分に力が無いのを説明している……いいのかな、私の前でそんなに説明して…明日菜さん、疑うんじゃないかなあ。

「そ、そうだ、桜咲さん！なんでここにいるの！？」

ネギ先生のことを言われて僅かに顔を赤くした明日菜さんの矛先が私を向いた。私は、鞆に入れていた物を取り出して困ったように笑う。

「春休みに、ちょっと実家の方に行って来たんです。エヴァンジェリンさんにお土産を買って来たので、それを渡そうと…」

「そ、そっか」

「すみません、慌ただしくて皆さんの分までお土産買えなくて…」

「いいよ、全然。こっちこそ、いきなり訳わかんない会話しちゃって……えっと…」

「？」

首を傾げる。そうすると後ろから肩を叩かれて、振り返れば意味が分からないというエヴァンジェリンさんが立っていた。

「おい、何のことだ」

「言っただじゃないですか、京都に行くつて。お土産です」

「おお！！」

八橋と、お茶っ葉、あと京都の景色の写真。まとめて渡すと、エヴァンジェリンさんが目を輝かせた。本当に好きなんだな…。

「……ん？」

ピクツと眉が跳ねる。僅かだけれど、反応があった。私の変化に気づいたエヴァンジェリンさんが訝しげに見上げてくる。小さく笑って、それじゃ、と声をかける。

「急用が出来ましたので、失礼しますね」

「ああ」

「お気をつけて」

「神楽坂さんも、それじゃ」

「え、あつ、桜咲さん？」

タツと走り出す。反応は僅かだから、命を狙うものじゃない。このちゃんに渡したお守り袋に入れられたお札。それが、このちゃんに危険が迫っていることを教えてくれる。

「（場所は……お風呂？なんでそんな所で……）」

伝わってきた場所に首を傾げつつ、飛び込むようにして中に入れば、外に漏れる声以上の音量で騒ぎ声が耳に飛び込んできて顔を顰める。

「このちゃん!？」

「あ、せつちゃん！大変や、ネズミやネズミー……！」
「ネズミ?」

危険の正体は、それか？このちゃんを背中に庇いつつ、視線を巡らせる。走り回る細長い生き物が、どういうわけかクラスメイトの水着を脱がしていた。

「（なんで水着、というよりこの生き物、絶対にカモさんだろ）」

エロオコジヨ、と呼ばれていたあの白い生き物が、まさかこんな騒動を起こしていたとは――。

そう思っていたら、その生き物がこっちに向かってきた。キラんと目を光らせたように見えただけ、襲って来たそれを片手で弾き飛ばす。

「ギャンー!!」

ベシヤッとお風呂場の壁にぶつかったオコジヨが、素早い動きでお風呂場から出て行く。とりあえずこれで終わり、なんだけど……参ったな。

「っ何やってんのよー!!」

後ろから明日菜さんが怒鳴り込んでくる。

参ったな、あのオコジヨがこのちゃんを巻き込まない様に、気を付けないと。

従者が狙われた日

このちゃんの話によると、カモさんはネギ先生のペットなんだとか。うちの寮、そういえばペット可だったっけ。忘れていた。

「でも、下着で寝るって……いいの？このちゃん」
「気持ちいいんやろ、きつと」

学校に向かって走りながらそんな会話。全然良くないと思うよ、このちゃん。長が知ったら何を言い出すか……あの人、結構な親馬鹿だから。

「というより、このちゃん。ネギ先生たち置いてきたけど、いいの？」

「ん、大丈夫やろ。でも、なんやネギ君がエヴァちゃんのこと恐がつてるみたいなんやけどなあ。どうしたんやろ」

「さあ……」

エヴァンジェリンさんはたぶん今日もサボりだろう。そう思いつつ、騒がしい教室の扉を開けた。

放課後、私はこのちゃんと千雨さんと服屋に来ていた。私経由でこのちゃんと千雨さんも仲良くなって、千雨さんはこのちゃんの天然っぷりに時折眩暈を覚えながら、それでも楽しそうにしている。

「この服、ちーちゃんに似合いそうやなー。なあ、着てみんか？」

「あ、ああ……」

このちゃんが千雨さんにそう言っただけで渡したのは、ひらひらが一杯のワンピース……なんだっけ、ゴスロリ？ ロリータ？ そんな服。麻帆良にこんな服屋があったことにも驚いたけれど、このちゃんがその店を知っていることにも驚いた。

「せつちゃんも、これ着てみ」

「わ、私は……やめとくよ」

「えー、なんでなんで？」

「おい刹那、テメエだけずりいぞ」

試着室に押し込まれる直前の千雨さんに睨まれる。いや、だって私はそんな服似合わないし。

「このちゃんは、着てみないの？」

「うちか？ んー……どないしょ」

とりあえず誤魔化せて、ほっと一息。そう思ったら

「あ、せつちゃん！ これこれー」

「私はいいつてばー！」

別の服を持ってきて突進してくるこのちゃんを避ける。そんなひらひらふりふり来たら、私の何かが壊れる。絶対に壊れるから、勘弁してこのちゃん。

「お、おい、木乃香。やっぱこれは……」

「ふわああ、ちーちゃん、かわええなあ」

「本当……すごく似合ってますね」

「っ……」

顔を真っ赤にして姿を見せた千雨さんに、感嘆の溜息。服以外はいつも通りだけれど、それでも可愛い。眼鏡を外して、髪を下したらもっと似合うんだろうけど。

「なあ、ちーちゃん。眼鏡外さへん？あと、髪も」

「む、無茶言うなよ！？」

「えー、でも勿体ないえ。一回だけでええから…な？」
「無理だつて！！」

眼鏡は伊達だつてこの前教えてもらったが、やっぱりまだ外してはもらえない。ゆっくりと慣れてもらうしかないかな。

と、私がのんびりとこのちゃんと千雨さんのやり取りを聞いていた時、妙な感覚と共に頭に声が響いた。

「おい、刹那」

「……エヴァンジェリンさん？」

「ああ」

声に出さず、頭で思うだけで相手に伝わるらしい。なるほど、これがこのネックレスの効果か。貰ってから、実際にこうして話すのは初めてだ。

「どうしました？」

「悪いが、茶々丸に付いていてやってくれ。今、あいつは一人だ」

「……何か、拙いことでも？」

「あの坊やにアドバイザーが付いたみたいだな。念のためだ」

「わかりました。茶々丸さんの居場所は？」

「辿ってみる。分かったら教える」

『お願いします』

ぷつりと何かが切れる感覚。たぶん、エヴァンジェリンさんが繋いだ回線が切れたんだろう。これ、こっちからも連絡できるのかな？今度試してみようか…。

「このちゃん、千雨さん」

「ん？どうしたせつちゃん？」

「ごめんなさい、ちよつと急用があつたの思い出して。先に帰って？」

「そうなん？うう、残念やね…」

しょんぼりするこのちゃん。罪悪感に胸が痛い。

「……もうちよつと抑え目な服なら、今度来たときに着てみるから。それで許して？」

「約束やえ？」

「うん。それじゃ、千雨さんも、すみませんけど」

「…ああ、んじゃな」

あの眼は、たぶん何かあつたことに気づいているんだろう。詳しくは知らなくても、千雨さんはそれがあるのを知っているから、あっさりと見送ってくれた。

『刹那』

『場所が分かりましたか？』

『移動している。今は——』

『——わかりました。では、そちらに行ってみます』
『頼む』

店を飛び出したところで、エヴァンジェリンさんからの念話で茶々丸さんの大まかな居場所を把握する。

人を蹴散らさない程度に速く走って、街の中心から離れた。方向は、エヴァンジェリンさんの家がある方。おそらくこの辺りにいる筈なだけ……。

その時、微かに猫の鳴き声を聞いて、ふと思う。茶々丸さん、たまに家で猫缶の用意をしていたことがあった。もしかして、野良猫の世話をしていたりするんだろうか。試に声のした方に歩いていくと、確かに茶々丸さんの姿があった。そして同時に、ネギ先生と明日菜さんの姿も。

「まさか……」

彼らが戦っているようなのは、すぐに分かった。エヴァンジェリンさんを倒す前に、まずは従者である茶々丸さんを狙ったのか。戦法としては、正しいんだろうけれど。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

「……!!」

明日菜さんの攻撃を躲した茶々丸さんに、ネギ先生の魔法が迫る。

「追尾型魔法接近弾多数、よけきれません———すみませんマスタ

ー……もし、私が動かなくなったら猫の餌を——」

「——ッ」

気づいた時には、私は茶々丸さんの前に立ちはだかっていた。懐からお札を取り出し、指に挟んで構える。

「防御結界——透壁」

結果が私と茶々丸さんを、魔法から守る。さすがネギ先生、なかなかの威力だ。どうにか守り切ったところで、お札が炎に包まれ灰と化する。大きく、息を吐き出した。

「刹那さん……」

「茶々丸さん、エヴァンジェリンさんが心配してますので、とりあえず今日は早めに帰ってあげてください。いいですか？」

「はい…ありがとうございます」

「いえ。それじゃ」

茶々丸さんが頭を下げて、ジェット噴射で飛んでいく。土埃が目に見えて痛い。

「さ、桜咲さん……」

「あ、こんにちはネギ先生、神楽坂さんも」

さて、問題はこっちかな。驚愕しているネギ先生と明日菜さんを前に考える。

驚きのあまり何も言えずにいる二人の後ろから走ってくるオコジヨを見つけて、ややこしくなる前に口を開いた。

「凄い光でしたね、今の。吃驚しました」

「え、えっと、その……」

「雨は降ってないですけど、雷でも落ちたんでしょうか？眩しくて私、目を開けてられなくて。二人は大丈夫でしたか？」

「うっ、うん、大丈夫！吃驚したね」

明日菜さんが話を合わせてきた。ネギ先生は固まったままだったけれど、それは明日菜さんに任せても大丈夫だろう。

「エヴァンジェリンさんから、茶々丸さんに早く帰るよう伝えてほしいって言われて、探してたんですよ。茶々丸さん、よく寄り道するらしくて」

「そ、そうなんだ……」

「ええ。それじゃ、私はこれで――」

「おいおいやいてめえ！ テメエもエヴァンジェリンの仲間か！？」

「うえっ！ カモくん！？」

ネギ先生の肩によじ登ったオコジヨが叫んだ。それに我に返ったネギ先生が慌てだして、明日菜さんもどうしようといった顔をしている。

「アニキ、こいつもエヴァンジェリンの従者に違い無いはず！」

「ええっ！？」

「ちよっ、何言ってるのよエロオコジヨ！！」

やんややんやと私を無視して騒ぎ出した明日菜さんたちに、首を傾げて困ったように笑うしかない。とりあえず、事無きを得て終わりたい私としては、多少の強引さを感じつつ誤魔化すことにした。

「面白いですね、腹話術ですか？」

「へっ……あ、ああ！ そう、そうなのそうなの！！」

「ぶぎゃっ」

明日菜さんがオコジヨの首を絞めて笑った。オコジヨの顔が真っ青に染まるが、そんなこと関係なしに笑っている。ネギ先生は、変わらずあわあわしたままだ。

「それじゃあ、私はこれで」

「う、うん。じゃあね」

「さようなら、桜咲さん」

戸惑い気味の二人に背を向けて、私はその場を後にした。

真祖が怒った日

目の前で怒るエヴァンジェリンさんを眺め、どうしようかなと思う。茶々丸さんからネギ先生に襲われたことを聞いたようで、最初は明日菜さんがパートナーになっていたことに面倒くさそうな、面白そうな顔をしていたけれど、どうやら私が間に入ったことまで聞いてしまったらしい。

私が間に入らなければ、機能停止していたかもしれないと茶々丸さんが言って、それを聞いて今に至る、と。

「坊やの分際で、頭が回ることだ……くくくっ」

「恐いです、エヴァンジェリンさん……茶々丸さん、どうにかできませんか？」

「無理です。今のマスターは、過去に類を見ないほどに怒っております」

「どう甚振ってくれようか。腕を引きちぎってやるのも面白そうだ」

「いや、エヴァンジェリンさん、落ち着いてください……気持ちはいく分かりますけど、とりあえず落ち着いて……」

私からすれば、このちゃんを殺されかけたも同然な事だけに、強く言えない。このちゃんが同じ目に会ったら、私も同様に怒るだろう。でもこのまま放っておいたらネギ先生が本当に殺されてしまうかもしれない……どうしよう。

「刹那さん」

「はい？」

「マスターは、何故あれほどに怒っていらっしゃるのでしょうか」

「……茶々丸さんが、傷つけられたからですよ」

「私が？」

ああ、そうか。ネギ先生と交流する前の茶々丸さんは、まだ感情とかそういうのを理解しきれていないんだ。だから、目の前のエヴァンジェリンさんが何に対して怒っているのか、それが分からずにいるんだろう。

「茶々丸さんが大切だから、傷つけたネギ先生が許せないんです」

「私が、大切……？」

「そうですよ」

まだよく分かっている様子の子の茶々丸さんが、何となく微笑ましい。口ポットとはいえ、生まれたばかりなんだよな、茶々丸さんって。こついうところを見ると、子どもを見てる気分になってくる。私も見た目は子どもだけど。

「——刹那」

「落ち着きましたか？エヴァンジェリンさん」

「ああ……刹那、礼を言う。茶々丸を助けてくれて、ありがとう」

「お気になさらず。私が、見ていられたただけです」

「それでも、私の家族を守ってくれたことに違いは無いさ」

ああ、ほら。やっぱりエヴァンジェリンさんは茶々丸さんが大切なんだ。そうでなければ、この人が私に礼を言うなんてありえない。

「ね、茶々丸さん。私の言った通りでしょう？」

「……はい、そのようです」

そう言った茶々丸さんがどこか嬉しそうに見えて、私は思わず笑ってしまった。

翌日の土曜日、私は学園長室に呼び出された。連絡があつた時は驚いた。仕事の依頼をされたことは結構頻繁にあるが、こんな形で呼ばれることは殆ど無いことだったから。

「さて、刹那君には少々、聞きたいことがあるんじゃないか？」

「私に答えられる事でしたら……」

学園長室には、学園長だけでは無く高畑先生も一緒にいた。今日は出張じゃないらしい。

「なぜ、あんな事をしたのかの？」

「……と、言われましても」

抽象的すぎて、どのことを言っているのか分かりません。

「……そうじゃの、では、先日の事から聞こうかの。なぜ、茶々丸君を助けたんじゃない？」

「友人が殺されかけるのを、むざむざ見過ごすことも出来ませんでしたので」

「ここ最近、やけにエヴァンジェリンと親しくしておるようじゃが、彼女とも友達かの？」

「ええ」

「彼女も魔法使いじゃが、よいのか？」

「大丈夫ですよ。彼女とは普通の友人でしかありませんから」

さらりと嘘を吐く。この口ぶりだと、私とエヴァンジェリンさんが戦ったことは知らないのかな……どうだろう。警戒はした方がいい

かもしれないけれど。

「木乃香とも、随分と一緒にいるようじゃが、どういう心境の変化かのお。お前さんは、木乃香にあまり近づかない様にしていると聞いておったが」

「……私が、このちゃんの友人でいるのは、いけませんか？」

「そういう意味じゃないよ、刹那君」

少しばかりムツとして学園長の言葉に返すと、高畑先生が苦笑して言う。

「木乃香君には、魔法の存在を知られてはいけないだろ？君も気づかれるのを警戒して離れていると思っていたから、どうして行動を変えたのかと思ってね」

「……お嬢様の周りには、ここ最近になって危険が多くなりましたので。護衛するにも、近くにいた方がいいと判断したまでです。これ以上、お嬢様に寂しい思いをさせたくもありませんでしたから」

「危険、とな……」

「身に覚えがあるわけではありませんか？」

「無いのお……ふむ、そうか。なら、こちらでも気を付けるようにしようかの」

「必要ありません」

「ふお？」

学園長の言葉を両断する。ここでお願いしますなんて言ったなら、どうせネギ先生辺りに妙な情報を流して、このちゃんの周りをうるつかせるだろう。そうしたら、なし崩しで魔法に気づかれる可能性だってあるし、他にもそういった手を打ってくる可能性がある。そんなの、許してたまるものか。

「そういつた危険から遠ざけるために、私はお嬢様と以前の関係に戻ったのです。そちらは、必要以上の干渉をしないでいただきたい」
「しかしのお、木乃香は僕の孫娘でもあるわけだし、それくらいは……」

「学園長は、同時に関東魔法協会の会長でもあるのです。必要以上の手出しは、ご自分のお立場を悪くする恐れもありますから、お止め下さい」

手出しして来たら、長への報告内容が増えることになるし、関係の悪化も免れないだろう。現時点で西側の印象が悪くなっているのだから、何もこれ以上悪くしなくてもいいのに。

「仕方ないのお……して、図書館島でのことはどうということじゃ？」

「図書館島？」

「あの言葉の意味を知りたくてのお」

「………学園長」

「ふお？」

「先ほどの茶々丸さんの一件から、お聞きしたいと思っていたのですが——ご自分の学園の生徒の危機を、ただ見ていらしたのですか？」

「ふおふお！？」

「剎那君？」

思わぬ切り返しに驚く学園長と高畑先生をよそに、私は言葉を続けた。

「図書館島ではクラスの数名とネギ先生が石像に襲われ、茶々丸さんはネギ先生と神楽坂さんに襲われ命の危機に晒されています。図書館島や茶々丸さんの件に、私が関わっていたことを知っているということは、それを見ていらしたんですね？」

「そ、それは、そのお……」

あれらの私の行動は、あくまでこのちゃんや茶々丸さんの友人として行った行動。仕事ではないから報告の義務は無い。つまり、私がいたことを彼らが知っているのは、その様子を見ていたからに他ならない。

「そちらがどういいうつもりで、不干渉に徹したかは知りませんが……友人の危機を捨て置けるほど、私は冷酷にはなれませんので。あの石像の正体や、どうして茶々丸さんがネギ先生に襲われていたのかは、私も知らぬところですのでお答えできませんが」

「そ、そうか……刹那君は、何も知らないんじゃない？」

「詳しいことは。ただ、学園長、一つお聞きしたいことが」

「なんじゃ？」

「先ほどの質問の、図書館島でのあの言葉の意味、というのは……私には、思い当たるのが石像に対して言った一言しか無いのですが」

「う、うむ……それが、どうしたんじゃない？」

「どうして、石像に対して私が言葉を発したのを、学園長が知っているんですか？」

「ふおおおおお！？」

この驚きようからするに、やっぱりあの石像を操っていたのは学園長で正しいみたいだな。だからああして、釘を刺すつもりであんな事を言ったんだけど……理解してもらえていなかったらしい。いや、理解していないふりかな？どちらでもいいけれど。……良くはないか。

「まさか、学園長自らが生徒を危険に晒したんですか？さすがにそれは、お嬢様の護衛としての立場からしても、何かしらの対処を取らせてもらわなければならぬのですが」

「対処、とな……」

「長には当然ながら報告させていただきます。東は西の長の娘に危害を加えようとしたと――」

「せ、刹那君！！」

「はい？」

「僕は、あれかの？何か質問を、したかのお？」

「……………いいえ」

変わり身の早さに本気で驚いてしまった。というより、これはあれだろうか。私がした行動は、脅しと言っても良いんだろうか……：ちよっと早まったかもしれない。まあ、向こうが取り消してきたんだし、全面的に向こうが悪いとして大目に見てもらうかな。

「お話は以上ですか？」

「い、いや。もう一つあるんじゃない？」

「なんででしょう？」

「今回の……ネギ君とエヴァンジェリンの一件については、関わらんで欲しい」

「それはつまり、先日の茶々丸さんのような事態を目撃しても、手を出してはいけないと？」

「うむ」

「……………分かりました。お話が以上なら、私はこれで失礼します」

了承して、学園長室を出る。別に、好きで事件に介入しようとは思っていない。昨日の件も、エヴァンジェリンさんに頼まれて茶々丸さんを探した結果の行動だし……助けられて良かったとは、思っているけれど。

あくまでエヴァンジェリンさんとネギ先生の問題のようだし、私に間に入ってどうこうするものでも無い。ならば、大人しくこのちゃんが見え込まれない様に注意を払うのが、私の仕事だろう。

とりあえず、今日はこの後、エヴァンジェリンさんとお茶をする約束だったし、このまま向かおうかな。

看病をした日（前書き）

無駄に長めです。一行にも満たないですが女の子同士でのキス？シーンがあります。

ただし、百合ラブ臭要素は無しです。苦手な方はご注意ください。

看病をした日

月曜日、いつものように学校へ行く準備をしていたところで、声が頭に響いた。

『おい、刹那』

『エヴァンジェリンさん？どうかしましたか、こんな朝早くに』

『……………今すぐ、うちに来い』

『何か用事でも？』

『茶々丸が煩いんだ。私はいらんと言っているのに』

『……………あの、意味がよくわからな』

『いいから来い！いいな！？』

一方的に念話が切られ、私はその場に取り残された気分で用意していた鞆を片手に、首を傾げる。

どうやら、エヴァンジェリンさんでは無く茶々丸さんが私に用事があるらしいけれど、いったいなんだろう。

「刹那、もう行くのかい？」

「あ、ああ。悪いが真名、先に行かせてもらっ」

「……………」

首を傾げる真名に曖昧に笑いながら、部屋を出る。何の用かは分からないけれど、行かないわけにもいかないし……………遅刻、しないといけど。

電車は使わず、走ってエヴァンジェリンさんの家に向かった。人目につかないように気をつけさえすれば、こちらの方が速い。

実は時々、エヴァンジェリンさんに別荘を借りて修行をさせてもらっているから、そのおかげで体の経験がだいぶ増えてきた。彼女の言うとおり、記憶がある分、すぐに色々と身に着けられている気がする。この場合は、取り戻していると言った方が良いのだろうか。そんなこんなで割とすぐにエヴァンジェリンさんの家に到着し、扉を叩く。茶々丸さんが出迎えてくれて、どうぞと促されるままに中に入った。

「それで、用事というのは？」

「はい。実は――」

「要らんとやっているのに、茶々丸が聞かないんだよ」

上の方から声がして、二階への階段の手すりに腰かけたエヴァンジェリンさんが、未だ寝間着姿で笑っていた。

パツと見でも分かるくらいに顔が赤く、いつもの調子で言っているつもりなんだろうが、何となく弱弱い声。明らかに具合が悪いと見て取れて、顔を顰めた。

「エヴァンジェリンさん、風邪をひいたんですか？」

「風邪？何を言っている。私は元気だぞ」

「いえ、マスターはご病気です」

「おいこらっ、茶々丸！」

キツパリと言い切った茶々丸さんに、心外だとばかりに叫ぶエヴァンジェリンさん。どちらを信じるかは、もうはつきりしている。

私は持っていた鞆を壁際に置いて、茶々丸さんに振り返った。

「エヴァンジェリンさん、普通の風邪ですか？熱は？」

「十五分前に計った時は三十九度でした。マスターは風邪だけではなく、花粉症も患っています」

「茶々丸、余計なことを言うな!!」

「……茶々丸さんが私を呼んだのは、エヴァンジェリンさんの看病の為ですか？」

「はい。私はこれから、ツテのある大学でよく効く薬を貰ってこようと思っていますので、その間、マスターをお願いできますか？」

なるほど、そういう事だったのか。さすがにこんな状態のエヴァンジェリンさんを一人にするのは不安だろう。私は頷き、首を傾げて聞いた。

「エヴァンジェリンさん、朝食の方は？」

「食欲が無いと、食べようとしません」

「なら、私が何か食べやすいもの作りますから……その薬は、それから飲ませてもいいですか？」

「はい。お願いします」

「っお前たち二人揃って、何を勝手に進めている！私は元気だと――」

階段を下りてきたエヴァンジェリンさんが、掴みかかろうと茶々丸さんに手を伸ばした。けれどその手は少しあげただけでだらりと落ち、彼女の体がふらりと揺れる。慌てて手を伸ばして、その体を受け止めた。小さくて軽い体。私も小さい方だが、それよりも小さい。

「だいぶ具合が悪いみたいですね」

「魔力の減少したマスターの体は、元の肉体である十歳の少女のものと変わりありませんので」

エヴァンジェリンさんの体を抱き上げて、階段を見上げる。ベッド

は二階だし、一度寝かせてから朝食を作ることにしよう。

「茶々丸さん、薬はそこに置いてください。後で、朝食と一緒に持って行って、きちんと飲ませますから」

「はい。それでは、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて、茶々丸さんが出て行った。私はすぐに二階へと上がり、エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせる。

息が荒いのを見て、朝食よりも先に水を飲ませるべきかと考え直す。キッチンでコップに水を汲み、桶に氷水を入れてタオルも一緒に持つ。少しだけどうにか水を飲ませて、濡れたタオルを額に乗せた。

「エヴァンジェリンさん、ご飯を作ってきますから、大人しく寝ていてくださいね」

「……………」

返事は無かった。このまま大人しく寝ていてくれれば良いと思いつながら一階へと下りて、キッチンに立つ。病人には定番のお粥で大丈夫かな。そうして作り始めてから暫くした頃、からんころんと呼び鈴が鳴った。

「茶々丸さん……………」

「あの、こんにちはー。担任のネギですけど、家庭訪問に来ました」

「ー」

「……………え？」

思わずぽかんと口を開けて、時計を見る。八時を過ぎているが、まだ朝だ。こんな時間に家庭訪問というのは、どうなんだろう。

「すみませーん」

「は、はい」

放置するわけにもいかず、慌てて駆け寄り扉を開けて顔を覗かせる。驚いたようにネギ先生が目を見開いた。

「えっ、桜咲さん!？」

「おはようございます、ネギ先生。あの……エヴァンジェリンさんに、何の用ですか？」

勝手に家に入れることも出来ないの、その場で応対する。ネギ先生ははっと我に返ったような顔をして、あのつと聞いてきた。

「エヴァンジェリンさんは、いないんですか？あと、桜咲さんがどうしてここに……」

「えっと、ネギ先生。エヴァンジェリンさん、風邪をひいていて。私は看病するためにお邪魔しているんです。それで、今日は——」

「そ、そんなまさか。彼女が風邪だなんて……」

「いや、ひきますよ。なのでネギ先生、今日はエヴァンジェリンさんはお休みしますので——」

「いらん、刹那」

「……エヴァンジェリンさん。寝ていてくださいと——」

「エ、エヴァンジェリンさん!!」

どうしてだろう。ことごとく話終える前に言葉を遮られる。

振り返れば、私が来たとき同様に階段の手すりに腰かけた彼女が、こちらを見下ろしていた。大人しく寝ていてくださいと言ったのに……。

そう思ったところで、ネギ先生が私を押しつけて家の中に侵入してきた。そのままエヴァンジェリンさんに向かって歩き出し、何かを突き出す。

「……なんだそれは」

「は、果たし状ですつ。僕と、もう一度勝負してください！——あ、それにちゃんと学校にサボらず来てください！卒業できなくてもいいんですか？」

「だから、呪いのせいで出席しても卒業できないんだよ」

「あの、エヴァンジェリンさん……」

無駄話はしないで、早く寝てほしい。寝なければ治るものも治らないのに。

「——まあいい。じゃあ、ここで決着をつけるか？私は一向に構わないが」

構いますから、魔力を高めないでください。フラスコも持たないでください。興奮して余計に熱が上がります。

とりあえず、開けたままの扉を閉めて二階への階段へと向かって歩く。

「……いいですよ。そのかわり、僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね」

よくありません、ネギ先生。杖を構えないでください、そんな風にしてこのちゃんを魔法に巻き込むのだけは、勘弁してくださいよ？無言で階段を上り、エヴァンジェリンさんに近づく。手を伸ばせばすぐに届く距離まで来た。

ニヤリと彼女が笑った瞬間、その手からフラスコが落ち、体がぐらりと揺れて倒れる。

「わ~~~~つ!~!」

「つと」

床めがけて倒れかけるエヴァンジェリンさんに、ネギ先生がパニックになったのか大声で叫ぶのを尻目に、その体を掴んで後ろに引き寄せ抱きとめる。ふらふらしていたから危ないと思ったけれど、やつぱりまた倒れた。床に落ちて割れたプラスチックは、後で掃除しないといけないな。

「見ての通り、倒れるくらいには重症です。風邪だけじゃなくて、花粉症も患っているようなので」

「その人本当に——ッ!!」

何か言いたげに口をパクパクさせて、ネギ先生は未だパニックに陥っている。たぶん、本当に吸血鬼なのかと言いたいんだろうなあ……

……ことあるごとに、私もそう思うから。

一先ずはさつさと寝かせてしまおうと二階に連れて行く。さつき持った時より、体が熱い……まさか、熱が上がっている？最後に計ったのは一時間ほど前になるけれど……もう一度、計ってみたほうが良さそうだな。

エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせ、布団をかける。お粥はもう殆ど出来ているから、それを食べさせて薬を飲ませて、あと服を着替えさせて。枕の横に落ちていたタオルを濡らし直して、額に乗せると立ち上がる。後ろを振り向いて、所在なさ気に立っているネギ先生に首を傾げた。

「何をしているんですか？」

「え……？」

「見ての通り、エヴァンジェリンさんは病気ですので……私も、彼女を一人にしておけませんので、今日は欠席します。先ほどの話がよく分かりませんが、家庭訪問は彼女が治ってからにした方がいい

「と思いますよ……？」

「あ、は、はい！そう、ですね……」

話しながら、何だかエヴァンジェリンさんの保護者になったような気分がして、小さく溜息を吐いた。彼女の方が数十倍年上だというのに、やっぱり見た目のせいなのかな。

チラチラとエヴァンジェリンさんを気にするネギ先生を追いやって、一階に下りる。時計を確認すると、九時になっていた。茶々丸さん、そろそろ帰ってくるだろうか。

お粥と薬を持って階段を上り始めてから気づく。なぜか二階が騒がしかった。

「……………ネギ先生」

「さ、桜咲さん！？」

上がってみると、どういうわけか杖を振り上げているネギ先生がいた。まさか、寝ているエヴァンジェリンさん相手に暴行を……？いや、そんな筈無い。改めて見るネギ先生の迂闊さとか不甲斐なさとかに混乱しているけれど、彼はそんなことをする少年じゃない………んですよ？

「どうしよう、不安になってきた……」

思わずぽつりと呟かれた言葉は、ネギ先生には聞こえなかったよう。慌てて杖を隠そうとする姿から見るに、私を魔法の関係者だとは思っていないらしいけど。修学旅行まで、何も知らないと思ってもらったほうがいいのかなあ。

「あ、あの、これは……」

「ネギ先生、あまり騒がないでください。エヴァンジェリンさんは

病人ですから」

「あ、あう……」

小さなテーブルにお粥を置いて、エヴァンジェリンさんの様子を伺う。

「サ、サウザンドマスター……やめ、ろ……」

「……」

ネギ先生の、父親の夢を見ているらしかった。ということは、ネギ先生はエヴァンジェリンさんの夢を覗こうとしたのか？自分の父親の情報が欲しくて。

「……エヴァンジェリンさん、起きてください」

「あ……！」

体を揺すって起こしにかかる、後ろでネギ先生が声をあげた。それは無視して、そのまま揺らし続ける。

ネギ先生には悪いが、今はエヴァンジェリンさんに朝食を食べさせることの方が優先だ。本当に知りたいのなら、ネギ先生が彼女に直接聞けば良い話なんだし……素直に教えてくれるかは、別として。

「……う……」

「エヴァンジェリンさん」

「……刹那か……なぜ、お前が……」

「茶々丸さんに頼まれて、貴方の看病をしていたんですよ。ほら、起きてご飯を食べてください」

「む、う……」

熱でボーっとするエヴァンジェリンさんの背を支えて体を起こす。

土鍋ごと持ってきたお粥を取り皿に移して、彼女と見比べる。ぼんやりとする彼女が、自力で食べられるとは思えない。

「エヴァンジェリンさん、口を開けてください」

「……あ？」

「あーんですよ、あーん」

「あー……ん？」

私の動作につられて開いた口に、そつとレンゲを差し込む。熱くは無いから、たぶん大丈夫だろうけど。

「ん、ぐ……」

「ゆっくり飲み込んでください。無理しないで良いですから」

「……んく」

「ほら、もう一度口を開けて……あーん」

「あー……ん」

喉も少し腫れているのか、エヴァンジェリンさんは時間をかけて少しずつお粥を飲み込んだ。何度か同じ動作を繰り返し、一杯目を食べ終えたところで首を振られた。少しでも食べてくれたし、十分か。

「それじゃ、次に薬です」

「う……」

「飲んでください」

「う……」

……熱は子どもを更に子どもにするんだっただろうか。薬と水を差しだすと嫌々と首を振るエヴァンジェリンさんを前に、本気でそう思った。

さて、どうしよう。薬を飲まないのは困るし、だからといって強引

に飲ませようとして飲んでくれるだろうか。

『んとなー……せつちゃんが、口移ししてくれたら、飲んでもええよ?』

不意に蘇った声。手の中の錠剤を眺めて、思い起こした声に知らず目を細めた。散々私を困らせて、本当にそうでないと飲んでくれないくて……翌日には治っていたから、よかったけれど。

人を困らせる一環でそういう行動を求めるんだから、お嬢様も人が悪い。それに最終的に応じてしまう私も、私だったけれど。

口に薬と水を含んで、そのまま口付ける。割と強引に流し込んで、口を離すと同時に彼女の口と鼻を塞いだ。

「ん~~~~っ!」

「飲まないで死にますよ」

「んんん~~~~っ!」

子どもから戻ったのかどうなのか、何やらくぐもった声で喚き散らして暴れる彼女を押さえつけて、様子を見る。諦めたのか涙目になつて喉が動くのを見て、ゆっくりと手を離れた。

「つぶは!はっ、はああああ……」

「見せてください……飲んでますね。茶々丸さんが大学から薬を貰ってきますから、そっちは素直に飲んでくださいよ?」

「殺すぞっ、貴様!」

騒ぐエヴァンジェリンさんを流しつつ、部屋を見回して首を傾げた。

「エヴァンジェリンさん、着替えはどこに仕舞ってますか?」

「あっ!?!……チッ。そのタンズだ。あと、水を寄越せ」

「はい」

尊大に言うエヴァンジェリンさんにコップを渡して、言われたタンスを開ける。彼女が着ているのと同じような服を取り出して、ちびちびと水を飲む彼女に渡した。

「汗で濡れてますから、着替えてください。自分で動けますか？」

「それくらいは出来る」

「なら、私は薬とかを一度、一階に置いてきますから、その間に着替えておいてください」

「ああ」

お盆に薬とお粥を乗せて立ち上がる。ところで、と振り返り、ぽかんと口を開けて立つネギ先生に聞いた。

「ネギ先生は、何時までここにいますもりですか？」

とりあえず彼女が着替えるので出て行つて下さいと、強制的に一階へと下した。

一階へと下りて、お盆を一先ずテーブルに置いたところで、鞆に入れたままの携帯が振動していることに気づいた。学校に持つていくときはマナーモードにしていたから気づかなかったが、着信が二十件を超えていて驚く。相手は、このちゃんと千雨さんと真名。一番多いのはこのちゃん、半分がそうだ。

とにかく連絡しようとボタンを押そうとしたら、また携帯が振動した。千雨さんだった。

「もしもし」

『あ、おい刹那か。お前、今どこにいるんだよ?』

「エヴァンジェリンさんの家です。風邪をひいていて、今日は看病するから休みます」

『そうなのか? こっちはスゲー騒ぎになってるんだけど。あの子ども先生は来ないし、龍宮より先に出たお前がいらないから、何か事件に巻き込まれたんじゃないかってクラスの連中は騒ぐし、木乃香はずっと泣きながらお前に電話してるし』

「……すみません。あの、このちゃんに代わってもらえます?」

『ああ……おい、木乃香!』

電話越しの喧騒の中に、千雨さんの声がこのちゃんを呼ぶ。まさかこんな騒ぎになってるなんて……本来なら騒ぎを収める筈のネギ先生がここにいるのも、問題かな。

『せつちゃん!? 今どこにおるん?』

「エヴァンジェリンさんの家だよ、このちゃん。風邪をひいて、エヴァンジェリンさんが今家に一人だから、看病してたんだけど……連絡、出来なくてごめんね」

『ほんとや! ぜ、全然、連絡つかへんからっ、またせつちゃん、あぶなっ、ことしてる、思っ……ふえええん……』

「心配かけてごめんね。大丈夫だから……ね?」

『う、ん。うんっ……』

話しながらまた泣き出してしまったこのちゃんに、胸が痛む。早々に連絡するべきだった。そうすれば、このちゃんがこんなに泣くことも無かつたんだから。

電話越しでどうにかこのちゃんを宥めて、もう一度、千雨さんと代わってもらっ。

『ったく。で、どうすんだよ。まだ騒ぎっぱなしなんだけど』

「ネギ先生をすぐに向かわせます。エヴァンジェリンさんの様子を見に、こっちに来てたので」

『はあ？もう十時過ぎてるぜ？何やってんだよ……』

「とにかく、もう少ししたら行くって……委員長に伝えてくれませんか？そうしたら、少しは収まるでしょうから」

『りょーかい。はあ、やれやれだったの……』

「すみません……」

『そう思うなら、次はちゃんと連絡しろよ？木乃香がこんな泣くなんで、よっぽどだろ』

「ええ、そうします」

千雨さんの言葉に心の底から頷いて、電話を切った。茶々丸さんが来たら、私もやっぱり学校に行こうかな。でも、重症のエヴァンジェリンさんを茶々丸さん一人に任せてしまうのは忍びないし……どうしよう。

とりあえず、早急に行動するべきこととして、ネギ先生に向き直った。

「ネギ先生」

「は、はい？」

「早く学校に行ってください。ネギ先生が来ないと、クラスで騒ぎになってます」

「えっ、えええ！？」

過剰なほどの驚いて、ネギ先生はバツと時計を見上げた。十時を回り、もうすぐ十時半になる。

「う、うわわわっ、どうしよう！大変だー！！」

「早く行ってください。それと、エヴァンジェリンさんと茶々丸さ

んは欠席です。私も……行けそうなら行きますが、たぶん休みます」
「えっと、あう、はい。そ、それじゃ……!!」

ぐいぐいとネギ先生を玄関へと押して行きながら伝えることを伝えて、見送る。何度か振り向いてはいたが戻っては来ないので、扉を閉めてその扉に背中を預け、ズルズルと座り込んだ。

「はぁあ……」

深く深く、溜息。このちゃんにも、千雨さんにも、あとおそらくは真名にも、心配をかけてしまった。

膝を抱えて自己嫌悪に陥る。何だか、自分が間違ったことをしているんじゃないかと、思ってしまう。

このちゃんが死なない未来を目指して、それで動き始めたけれど。

結局、このちゃんを泣かせてしまった。図書館島といい、今回といい……私は、失敗してばかりだ。もしかして私は、手を出さない方が良かったんだろうか。昔の私と同じように、今はまだ、見守るべきだったんだろうか。

分らない。そもそも、今私がしていることで、本当に未来が変わるんだろうか。仮契約をさせず、このちゃんが望む世界で生きられるように長たちにも話をして、何かが変わるんだろうか。

このちゃんに心配をかけて、泣かせて、本当にこのちゃんは幸せになれるんだろうか。

「——何を悩む。刹那」

「ツエヴァンジェリンさん……」

階段の途中に立つエヴァンジェリンさんが、私を見下ろしていた。ゆっくりと下りてくる彼女を視線だけで追って、駄目ですよと声をかける。

「まだ寝てないと……」

「平気だ。それよりも、そんな所でいたい、何に悩んでいる？」

「……悩んでなんか、いませんよ。私の事より、とにかくベッドに――」

「お前の事だ。どうせ、自分が間違っているんじゃないかとでも、考えていたんだろう」

「ッ……」

面白いくらいにピタリと言い当てられて、言葉も無い。はんつとエヴァンジェリンさんが馬鹿にするように笑って、腕を組み私の前に立った。

「近衛木乃香は、随分と泣いているようだったな」

「なんで、分かるんですか……」

「電話越しでも十分聞こえるくらいに騒がしかったからな。ましてや、泣き声なんてすぐにわかる」

「……………私は、本当にこれでよかったんでしょうか」

抱え込んだ膝に額を乗せて、目を閉じる。暗闇は心地よさも何も与えてくれなくて、私の中ではぐちゃぐちゃの感情が入り混じり続ける。

「このちゃんと元の関係に戻ってから、私は二回もこのちゃんを、私のせいで泣かせてしまって……このちゃんが、あんな風に泣くこと、滅多に無いのに」

散々、心配をかけて、泣かせて。このちゃんは、強い人だから……心がとても強くて、ちよつとやさつとじゃ、折れたりしないのに。あんなに、泣かせてしまった。私は、あんな風に泣くこのちゃんを、

殆ど見たことが無い。未来でも、このちゃんはあんなに泣いたり、しなかったから。

それを、戻って来てからの私は、二度も泣かせてしまった。私が、関わったせいで。

「本当なら、私はまだこのちゃんに関わらない筈だった。影からこのちゃんを見守るだけで良かった。それなのに、私は――」

このちゃんを見た瞬間、手を取ってしまった。一度失った手を取り戻して、自分からまた離すなんて、出来なくて。それならこのちゃんの隣に立って、このちゃんを護ろうと。今度こそ、死なない未来を得ようと、そう思ってた。なのに、その結果がこれだ。

「私がいなければ、このちゃんは泣かずにすんだ！図書館島で、飛び出して残った私に泣き叫ぶことも無かった！今日、連絡がつかない私に心配して泣くことも無かった！――」

全部全部全部、私がいなければよかったこと。昔のように、あまり深く関わらずにいればよかったことなのに。どうして私は、それが出来なかった。

「泣かせたくなんて無かった！！笑っていてほしかった！！このちゃんに――このちゃんに幸せになっただけで、私は別の未来を選ぶ決意をしたのに！！どうしてこのちゃんをこんなにも泣かせてしまった！？」

私はまた、間違えてしまったのかもしれない。

「――刹那」

静かに、何も言わずにただ、私の言葉を聞いていたエヴァンジェリンさんが、私を呼んだ。

目を開けて暗闇から戻り、ゆっくりと顔をあげる。私の目の前に膝をついた彼女と目が合い、瞬間、パシンツと音が響いた。

「エヴァン、ジェリンさん……」

左頬が熱い。ヒリヒリとした痛み、衝撃でずれた視界を前に戻せば、怒った表情のエヴァンジェリンさんが、変わらずそこにいた。

「お前は、馬鹿だ」

「え………？」

「馬鹿だと言ったんだ。お前は」

叩かれた頬に、手が伸ばされ、優しく撫でられる。怒った顔をしているのに、その手は慈愛に満ちていて、その言葉も何も分からなくて、私はその瞳を見つめるしかない。

「刹那。全く同じ人生なんて、絶対に無い」

「なに、を……」

「過去のお前の行動を、お前がそのまま真似をしたとして。確かにそれは、同じ人生を辿っているように見えるかもしれん。けどな、そう見えるだけで、違うんだよ」

「ちがう、って……」

「お前だよ、刹那」

エヴァンジェリンさんの言葉に、首を傾げる。私が、違う？

「近衛木乃香を見守るお前が、どう思っのか。たとえ行動を真似しても、お前の中身までは同じじゃない。過去のお前と、今のお前。」

思うことは、違っだろう。現にお前は、近衛木乃香を見て我慢できなかった。見守り続けるという選択を、選べなかっただろう？」

「で、も……それが、まちが、って……」

「はあ……お前は、間違わずに生きていけると、本当に思っているのか？」

「そうじゃ、なくて……私は、間違えてはいけないんです……」

たった一つの間違いのせいで、このちゃんは死んでしまった。もう二度と、同じ間違いは許されない。絶対に。

「このちゃんが、死なない未来を……私は、このちゃんを今度こそ護ると、誓ったんです」

「……ああ。そう誓うのは悪いことじゃない。ならなおの事だ、刹那——間違いを恐れるな」

エヴァンジェリンさんは、そう私に言っで、言葉を続ける。

「人は間違えることで何かを学び、成長する。護りたいなら、間違いを恐れて立ち止まるな。進み続ける。そうして間違えたなら、それを飲み込んで、踏み潰して、また進め。今のお前は、犯した間違いに怯えて、ただ震えている馬鹿な奴だ」

このちゃんを泣かせてしまったと、怯えて。そうして、動けなくなつて。終いには全てを間違えてしまったと、思つて。

ああ、なるほど。確かにエヴァンジェリンさんの言うとおり、私はただ怯えて、震えているだけだ。

また泣かせてしまうかもしれない、間違えてしまうかもしれない。過去の末に辿り着いたこのちゃんの死という未来に、また辿り着いてしまうかもしれない。全てに、怯えている。

「間違えない人生なんて無い。全く同じ人生なんて無い。全く同じ未来なんて無い。お前が過去に戻ったという時点で、未来はもうお前の知るものとは別の方向に向かってるんだよ」

「…… たった、それだけのことでですか？」

「十分だろう。お前はお前が生きた分だけ、間違いを犯して、成長している。その結果お前は、近衛木乃香と仲直りをしている。長谷川千雨を捨て置き、暇を見て話し相手になっている。私や茶々丸と、共に学校に行っている。過去のお前と、どれだけ違うんだ？」

「…… 全然、違います。このちゃんとはまだ、話すことなんてできなくて。長谷川さんだつて、話したことも無くて。エヴァンジェリンさんや茶々丸さんを、このちゃんを傷つけるんじゃないかって警戒してて…… 全然、違いますよ」

「当たり前だ。私はお前に興味を持ち、呼び出した。過去に戻ったというお前の気配が、変わっていたからだ。そうでなければ、私は今の時点で、お前にそれほど興味を持っていないかもしれん」

「そうかも、しれませんか……」

くつりと喉を鳴らして言った彼女に、思わず苦笑いした。確かに、昔の彼女は私に、どれだけの興味を抱いていたのだろう。昔の私は、こうして彼女の家にお邪魔する私を、想像できただろうか。

「…… お前は、少しだけ変わった知識を持った奴だ。ただ、それだけだ。神でも何でもない。知らないことを、間違えることを恐れるな。お前が進む限り、私の目の前にいる桜咲刹那の未来は、変わり続ける」

「…… はい」

小さく、頷いて。ゆっくりと離れていく彼女の手を追った先で、その瞳と合った。

「過去のお前じゃない。今のお前を生きる。刹那」

それは、まるで母親のような。そんな瞳だった。

「——ありがとうございます、エヴァンジェリンさん」

未来はもう、変わり始めているのなら。私は、歩き続けよう。
犯した間違いを忘れずに、それを踏み越えて、誓いを胸に飛び続けよう。

看病をした日（後書き）

いつになく刹那がテンパってましたが、おかしい部分などありましたら見逃してくれると助かります……。。

約束をした日

あれから、薬を貰って帰ってきた茶々丸さんにエヴァンジェリンさんの事を任せて、私は昼から学校に行くことにした。心配をかけたこのちゃんに、きちんと会って安心させたいし……でも、今の状態で魔法について話したら、このちゃんはどんな反応をするんだろう。なんだか、余計に心配をかけてしまう気がする。

「……………」

クラスの扉の前に、違和感に立ち止まり首を傾げる。今は昼休みで、廊下にも人が溢れて騒がしいのに、なぜかうちのクラスだけやけに静かだ。

緊張に汗が滲む。よし、と意気込んで、それでも静かにゆっくりと扉を開けた。

「……………」

なぜか、クラスの人たち全員がぐったりしていた。教室にこれ以上入るのに躊躇を覚えるが、中に入り扉を閉める。音に気付いた一人がむくりと顔を起こし、私に気づいた。

「あ、桜咲さん」

「せつちゃん!？」

バシッと弾かれるように飛んできたのは、案の定このちゃんで。全身でぶつかってくるこのちゃんを受け止めて、どうしようかなと悩

んだ末に笑った。

「このちゃん、おはよう」

「おはよっ、せつちゃん！うう…せつちゃんやあ……」

「心配かけてごめんね。エヴァンジェリンさん、思ったよりも具合悪かったみたいで、どたばたしちゃってて」

「ええよ、もう……でも、また同じことしたら、許さへんからね？」

言い訳がましいな、と思ったけれど。このちゃんはギュウツとしがみ付いたままでとりあえずは許してくれた。相変わらず、優しいこのちゃん。

「にしても……このちゃん、何かあったの？やけに静かだけど……」

「あー、それはなあ……」

「騒ぎ過ぎて新田先生にぶちぎれられたんだよ」

バシッと頭を叩かれて、降ってきた声に顔をあげると千雨さんがいた。はあ、と溜息を吐いて顔を背けられる。

「あんま心配させんな」

「はい……すみませんでした、千雨さん」

千雨さんにも、随分と心配と迷惑をかけた。抱き着いたままのこのちゃんの背中を撫でつつ、今度お礼をしようとも思う。このちゃんにも、何かお詫びしよう……何がいいかな。

「……あ、桜咲さん……えつと……」

教壇にてこれまたぐったりしていたネギ先生が、戸惑いつながらも近づいて来た。彼も新田先生に怒られたんだろうか……新田先生は、

良い先生だけれど、怒ると怖い。すごく怖い。

「エ、エヴァンジェリンさんの具合は……」

「少しは良くなったみたいです。今は、茶々丸さんが看病してますから……二、三日中には治ると思いますけど」

「そうですか……」

ふらふらと教壇へと戻っていくネギ先生。依然、私たち以外は誰一人と動かないけれど……明日には、治ってるかな？

「このちゃん、お昼は？」

「まだ……」

「一緒に食べよ？」

「うん」

「私も一緒にいいか？……っつか、食べるなら他行こうぜ」

「そうしましょうか……」

此処で食べるのは、さすがに厳しいものがある。

放課後、千雨さんとこのちゃんにお詫びとしてケーキを焼いてみました。私が作れることに驚いていましたけれど……喜んでくれたようでよかったです。その後は、真名にもあんみつを作って食べてもらいましたが、好評でした。三人にまた作るよう言われたんですが、今度は何を作ろうかな。

翌日、私は少し早めに寮を出た。理由は簡単で、このちゃんに散歩

に行こうと誘われたからだった。

前に、エヴァンジェリンさんと一緒に学校に行ったときに、誤魔化すために散歩という言葉を使ったが、その時にこのちゃんと今度一緒に行く約束をしていた。その約束を果たそうということだ。

「おはよ、せつちゃん」

「おはよう、このちゃん」

寮の前で合流して、歩き出す。とりあえず学校に向かいながら、のんびりと。

「いい天気やね」

「そうだねえ」

日差しが暖かい。他愛も無い話をしながら、まだ静かな道を進む。

「そういえば、ネギ先生のペットは元気ですか？」

「ああ、カモ君のことやね？んー、最近は明日菜に懐いてるみたいや。よく一緒にいるえ」

「このちゃんには？」

「うちはあんまりやなあ。ちょっと寂しいんよ」

「そう……」

明日菜さんに、というのはちょっと気になるけれど……このちゃんの方には、まだあまり関わっていないみたいか。安心は出来ないけれど。

「今日は停電の日やし、カモ君恐がらんとええけどなあ」

「大丈夫ですよ、たぶん」

「せやな」

停電、か。そういえば、昔はどういうわけか学園結界の効果が切れて、侵入してくる魔物の一掃に駆り出されたんだっけ。原因については結局、教えてもらえていなかったけれど……寮には、結界を張っておいた方がいいかもしれない。

「なあ、せつちゃん」

「ん……なに？このちゃん」

「聞いても、ええんかな？」

少しだけ私の前を歩くこのちゃんの顔は見えなくて、静かに聞かれた声に疑問を抱きつつ、私は何をと小さく返した。

「せつちゃんは、何からうちを護ってくれてるんや？」

「……このちゃん、それは……」

「言えへんこと？」

「……ごめんね」

「そか……」

何から、このちゃんを脅かす危険から。このちゃんを殺す、魔法から。

言えたらどれだけ楽になるんだろう。その存在を知るだけで、このちゃんの周りにある見えない脅威が、見える様になるのに。

長の願いと、私の迷いが、言葉を詰まらせる。間違いを飲み込んで、踏み潰して、進めばいいのに。未だに私は、間違いを犯すことに怯えている。長の言葉を、意向を言い訳して、誤魔化している。

「なら、これだけは教えて」

立ち止まり、このちゃんが振り向いた。じっと私の瞳を見つめて、

逃がさない様にして。

「図書館島で、飛び出したのは——うちの、護衛やったから？」

「……………どうして、そんなことを聞くの？」

「せつちゃんが、うちのせいで危ないことをするのは、嫌やから」
「そう」

私がこのちゃんの護衛だったから、飛び出した。それは確かにある。
でも、それが全てなのかと言われたら

「違うよ」

私は、そう答える。

「確かに、私はこのちゃんの護衛だけど、それだけじゃない。この
ちゃんの為だけに、飛び出したわけじゃない」

「なら、何のため？」

「自分の為」

私の答えに、否を唱える人もいると思う。でも、私は全てをこのち
ゃんの為だったと、言い切ることが出来ない。私はあの時、自分の
為に飛び出した。

「このちゃんは、私にとって大切な友達だから。絶対に護りたいつ
て、思ったから。このちゃんを傷つけさせたくないって、私がそう
思ったから、私は飛び出したんだよ」

「……………うちが嫌や言うても、聞いてくれへんの？」

「うん、ごめんね。このちゃんが止めても……………私は、行くよ」

「どうして、どうしてそこまでするん？そんなにしてうちを護りた
いって、なんでなん？うちに、何があるの？せつちゃんが危ない目

にあつてまで護る価値、うちにあるいの？」

このちゃんの顔が、今にも泣き出しそうに歪む。私はまた、このちゃんを泣かせてしまうのかもしれない。

そつと手を伸ばして、抱き寄せる。背中に手を回して、強く強く、抱きしめた。

「そうじゃないんだよ、このちゃん」

ただ私の想いを伝えるために。

「私がこのちゃんを護るのは、このちゃんが私の友達だから。ただ、それだけ」

「友達、やから……？」

「うん。今は、言えないけど……いろんなこと、いつか絶対に話すから。心配させると思っけど……まだこのまま、このちゃんを護らせて？」

「……止めても聞かない、さっき言つてたやん。言つても、勝手にするんやろ？」

「うん」

「なら、約束してや」

抱き着いたままでこのちゃんは、絞り出すように言葉を紡ぐ。

「いつかうちに、いろんなことを教えて。せつちゃんが、何からうちを護りたいのか、教えて」

「うん」

「それから——絶対に、帰ってきて」
「……………うん」

帰って来るよ、絶対。このちゃんのために、帰ってくるから。

何も知らないこのちゃんには、たくさんの心配をかけると思うけど。
何かを知ったこのちゃんにも、やっぱり心配はかけると思うけど。

絶対に、帰ってくるから。泣かないで、このちゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232x/>

逆行した日

2011年10月30日15時59分発行